

日本における「シンデレラ」（灰かぶり）の受容 — 大正期を中心に —

野 口 芳 子

Abstract

Während der Taisho-Zeit wurde das Märchen von "Aschenputtel" insgesamt 14 mal ins Japanische übersetzt, dabei neun Übersetzungen nach der Grimmschen Fassung und fünf nach der Perraultschen Fassung. Dies steht im Gegensatz zur Meiji-Zeit, in der die Perraultsche Fassung mit Abstand am weitesten verbreitet war. Auch die im Märchen verwandten Namen wurden in der Taisho-Zeit in 12 von 14 Erzählungen in japanische Namen umgewandelt, im Gegensatz zur Meiji-Zeit, in der englische und japanische Namen jeweils zur Hälfte verwendet wurden.

In den Kinderzeitschriften der Taisho-Zeit bestand die Tendenz, ausländische Namen zu japanisieren. Während der Meiji-Zeit wiesen Erzählungen, die in japanischen Lehrbüchern enthalten waren, den höchsten Grad an Modifikationen auf, aber in der Taisho-Zeit wiesen dagegen Erzählungen, die für Drehbücher von in den Schulen aufgeführten Kinderdramen adaptiert wurden, den höchsten Grad an Modifikationen auf. Dies liegt wahrscheinlich daran, dass eine pädagogische Absicht im Vordergrund stand.

Anstatt von einer weiblichen Fee mit einem Zauberstab verwandelt zu werden, weist die Schutzgottheit eines alten Mannes das Mädchen an, sich hinter einem Schrank dreimal umzudrehen, und das Mädchen verwandelt sich dann in eine wunderschöne Gestalt. Hier zeigt sich die Shinto-Lehre, dass ein Wunsch in Erfüllung geht, wenn man sich dreimal dreht.

Drei Erzählungen wurden von Umekichi Tanaka, Chotei Toshioka und Kiichi Kaneda originalgetreu nach der Grimmschen Fassung übersetzt. Die Übersetzung von Masao Kusuyama nach Perrault ist ebenfalls wortgetreu.

Die einzige zweisprachige Schulbuchausgabe des Aschenputtel-Märchens ist eine deutsch-japanische Version, aber eine zweisprachige französisch-japanische Version gibt es weder in der Meiji- noch in der Taisho-Zeit. Dies ist wahrscheinlich darauf zurückzuführen, dass sich in der Taisho-Zeit die Lehren der Herbart-Schule durchsetzten, die die Verwendung Grimmscher Märchen als Unterrichtsmaterial förderte.

序論

前回の75号で明治期における「シンデレラ」の邦訳は12話（ペロー版9話、グリム版3話）存在することを明らかにし、その内容や邦訳者について詳述した。本論では大正期における受容について論述する。大正期に邦訳された「シンデレラ」にも言及した先行研究は存在するが、大正期の「シンデレラ」に焦点を当てた包括的な研究はない。したがって、大正期に邦訳された「シンデレラ」の数やその内容などについての詳細は明らかにされていない。調査の結果、大正期には14話の邦訳が存在することが判明した。邦訳の内容は、ペロー版「サンドリヨン」が5話で、グリム版「灰かぶり」が9話である。明治期の邦訳が主としてペロー版であったのと対照的で、大正期にはグリム版が多数を占める。ドイツ語に和訳を併記した独和对訳叢書が数多く出版されたからであろう。本論ではそれらの14話について邦訳内容を紹介し、改変点を明らかにしていく。また、邦訳者についても筆名だけでなく、可能な限り実名を明らかにしていく。なお、再調査の結果、前回の拙論における邦訳者の情報に関して新たな事実が判明したので、本論文でその部分の訂正もしていく。

なお、この論文で使用するグリム童話とペロー童話の原典テキストは下記のものである。

- 1) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. v. Heinz Röllele, Bd.1, Stuttgart: Reclam 1980, S. 137-144.
- 2) Charles Perrault : *Contes de Fées. Die Märchen. dtv zweisprachlich Edition. Übersetzt von Ulrich Friedlich Müller*. München: dtv 1975, S. 76-93.

第1章 先行研究について

1. 大正期における受容についての先行研究の概観

大正期に邦訳された「シンデレラ」についての先行研究は書誌目録も含めて3本存在する。それらをまず、発表年順に番号を付けて紹介し、内容がペロー版はP、グリム版はGと略記する。なお、ここで紹介する「シンデレラ」についての先行研究は、大正期の日本での邦訳に焦点を当てたもののみを対象とする。

2. 大正期における受容に関する先行研究の詳細

- 1) 2003年 舛屋仁奈「日本におけるシンデレラの改変－明治期から1960年代までを中心に－」（日本ジェンダー学会誌掲載論文）G ⑬⑰②⑤¹、P ②①の4話

大正期の邦訳4話の書誌を紹介している。舛屋は1926年12月30日出版の『世界童話体系』所収の「サンドリヨン」も大正期のものとしているが、これは昭和期のものである。なぜなら、大正天皇の在位期間は1912（大正元）年7月30日から1926（大正15）年12月25日までなので、それ以降の12月30日は昭和期になるからである。舛屋は奈倉の意見を参考に「大正期のシンデレラの特徴は、改変があまり見られず、原作に忠実な訳である」と述べている²。その理由として「明治期のような、ストーリー性を中心にしたおもしろい読み物の紹介に留まらず、外国文学

者による原典そのものの翻訳が多くなったという、この時期の特徴にもよる」ものと結論づけている³。

2) 2005 年 川戸道昭／榊原貴教共編「目録編サンドリヨンあるいは小さなガラスの上靴」

『児童文学翻訳作品総覧 3 巻』所収、ナダ出版センター

P ⑮⑰の 2 話の書誌のみを紹介している。

3) 2005 年 川戸道昭／榊原貴教共編「目録編 グリム編 KHM 21『灰かぶり』」『児童文学翻訳作品総覧 4 巻』所収 ナダ出版センター

G ⑬⑭⑯⑰⑳㉑の 6 話の書誌のみを紹介している。

上記 3 点の先行研究ではグリム版の邦訳 6 話⑬⑭⑯⑰⑳㉑の書誌と、ペロー版の邦訳 2 話⑮⑰の書誌のみが紹介されており、内容について具体的な紹介はされていない。本論では新たに発見した 6 話 (⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔) も含めて 14 話すべての内容を紹介し、邦訳者についても紹介していく。

第 2 章 大正期の翻訳について

1. 大正期の邦訳一覧表【表 1】

番号	西暦	大正年月	訳者 筆名 実名	題名 副題	掲載媒体	出版社	底本 挿絵家	紛失物	結婚 式場	G P
⑬ 1	1914	3 年 10 月	田中樸吉(譯註)	灰かぶりさん	グリムスの童話 独和対訳独逸国民 文庫 第 1 編	南山堂	Grimm 挿絵なし	金の上靴	会堂	G
⑭ 2	1914	3 年 11 月	年岡長汀(譯註)	燃屑姫	グリム十五童話 独話対訳	南江堂 京都支店	Grimm Offterdinger	黄金の靴	教会	G
⑮ 3	1915	4 年 6 月	星野辰男	水晶の靴(灰娘)	セーヌの流	通俗図書中央販売所	不明 挿絵なし	水晶の靴		P
⑯ 4	1915	4 年 10 月	藤沢衛彦 <small>もりひこ</small>	燃屑姫	通俗グリム童話 物語	通俗教育普及会 出版局	Grimm Müller-Münster	黄金の靴	都会	G
⑰ 5	1916	5 年 5 月	中島孤島 中島茂一	消炭さん	グリム御伽噺 (新訳)	富山房	不明 岡本帰一 Polster	金の上沓	教会	G
⑱ 6	1916	5 年 6 月	新井弘城 南部新一	踊り靴	幼年百譚 お話 の庫春の巻	博文館	不明 挿絵なし	<small>びいどう</small> 硝子の 踊靴		P
⑲ 7	1919	8 年 7 月	少年通俗教育会	消炭娘	グリム物語 世界童話	博文館	不明 不明	<small>こがね</small> 黄金の沓	教会	G
㉑ 8	1919	8 年 9 月	巖谷小波 巖谷季雄	<small>こがね</small> 黄金の靴	教訓お伽夜話 前編	博文館	不明 挿絵なし	黄金の靴		G
㉒ 9	1920	9 年 9 月	楠山正雄	サンドリヨンの話	驢馬の皮 世界童 話名作集第 1 篇	家庭読物刊行会	不明 森田久	ガラスの 上靴		P
㉓ 10	1921	10 年 12 月	若目田三郎	爐邊の乙女	長靴をはいた猫	目黒分店	不明 挿絵なし	<small>がらす</small> 玻璃の靴		P

②③ 11	1922	11 年 4 月	中島孤島 中島茂一	かまと姫 (童話劇)	金の船(金の星) 5 月号	ほるぷ出版	不明 岡本帰一	水晶の靴		P
②④ 12	1924	13 年 6 月	葉多黙太郎 葉田黙太郎	金の靴	『グリム童話集』 世界新おとぎ	崇文館書店	不明 挿絵なし	金の靴		G
②⑤ 13	1924	13 年 7 月	柏木治子	シンドレラ	グリム童話	南海堂	不明 不明	金の靴		G
②⑥ 14	1924	13 年 8 月	金田鬼一	灰かぶり	グリム童話集 世界童話体系 2 巻	世界童話大系 刊行会	不明 挿絵なし	黄金の靴	教会	G

2. 大正期の邦訳の内容と邦訳者について

1) ⑬ 1914 (大正 3) 年 10 月 田中樸吉訳「灰かぶりさん」『グリム童話』独和对訳独逸国民文庫第 1 編 南山堂書店 G 原文に忠実訳

(1) 邦訳の概要

実母は臨終の床で、娘に「信心深く、正直」でいるよう遺言する。継母の連れ子の姉たちは 2 人とも顔は「美しく色白出有ツツけれど、心は卑しく黒かつた。」実子の彼女を「鶯鳥」と呼び、美しい服を脱がせて、灰色の古い木綿の服を着せ、木の靴を履かせる。祭市に行く父に土産に「貴方の帽子を突當つた最初の木の子」を頼む。榛の枝を墓に植え、泣いて願いごとをすると、白い鳥が来て、望みのものを落としてくれる。宴会に連れて行く条件として、継母は 1 鉢の扁豆^{なたまめ}を 2 時間以内に灰の中から拾うよう命じる。やり遂げると、次は 2 鉢の豆を 1 時間以内に拾うよう命じる。2 羽の白い鳩に助けられてやり遂げるが、着物がなく踊れないという理由で連れて行かない。灰かぶりは墓に行き、榛に頼む。「樹さん、揺れ揺れ / 黄金、^{こがね}銀^{しろがね}妾に振れ」すると、実際に鳩が金銀の着物や絹の上靴を落としてくれる。2 回目も、3 回目も黄金色の着物や黄金の靴を落としてくれる。彼女は晩方まで踊り帰宅する。王子がついてくるが、鳩小屋に飛び込む。王子が父に言うと、父親が斧で鳩小屋を割る。2 日目も夕方に帰る。王子がついてくるので、梨の木に登る。父が梨の木を切る。3 日目は「光沢で輝いた」(prächtig und glänzend) 服と「全く金糸で縫ひつぶされた」(ganz golden) 上靴で参加し、全員の注目を浴びる。夕方になり帰ろうとすると、王子が階段全体に瀝青^{れきせい} (ちゃん) を塗らせておいたので、左の金の上靴が階段にくっつく。王子が他に娘はいないかと聞くと、父は「ちいさな、お話にも成らない灰かぶり」がいると言う。彼女が履くと靴はぴたりと合う。鳩に本当の花嫁と保証され、王子は灰かぶりを城に連れて帰る。王子と灰かぶりが結婚式で会堂〔原典：Kirche (教会)〕へ行く時、継姉たちが両横に付き添うと、鳩が姉たちの両眼を啄きだして盲目にする。「二人は自分の悪心と偽りの酬ひに、盲目にされて一生涯罰を受けることゝ成つた」で終わる。

(2) 邦訳の分析

原文に忠実な訳である。グリム兄弟は第 2 版から善悪を白黒で表現するよう手を加えるが、ここでも善悪を白黒で表現する邦訳がなされている。おそらく決定版からの邦訳であろう。誤訳も存在する。「ヒラマメ」が「ナタマメ」と訳されている。Linse は漢字では「扁豆」と正しく訳

されているが、ルビが「ナタマメ」となっている。ナタマメは「鈍豆」と書き福神漬けや茶などに用いられる豆である。扁豆は「ヒラマメ」と読み、空豆属の1種である。実子の灰かぶりを父親は原典では「発育不良(verbuttetes)」と表現しているが、ここでは「ちいさな、お話しにもならない」娘という婉曲的な表現に留められている。花嫁と花婿が式を挙げる場所が教会ではなく、会堂と訳されている。キリスト教の概念が日本の読者に理解しにくいからか、それとも意図的に避けられたのか、理由は不明である。最後に、悪事の報いとして継姉たちが鳩に両眼を啄き出されて盲目にされる箇所は、原文に忠実に訳出されている。

(3) 訳者について

田中樗吉(1883-1975)は東京帝国大学独文科を1909年に卒業し、ドイツに留学し、その後、フランス、イギリス、アメリカを外遊する⁴。帰国後、京城大、愛知大、中央大などの教授を歴任する。著書に『ドイツ童話史』、『グリム研究語学篇』『綜合言説 日独言語文化交流史大年表』があり、翻訳に『祖稿グリム童話全集』がある⁵。

田中の対訳本『グリムの童話』には「グリム兄弟の生涯とその童話」という項目が最後にあり、兄弟の略歴と著書、童話に対する思いなどが詳しく紹介されている。童話集編集という「この事業はGrimmの愛郷心から湧いた、敬虔の念に満ちた學問上の報告であるから、兄弟は努めて民間伝承に忠實ならん事を努めた」と説明している⁶。

グリム兄弟の手書き原稿はレレケ版(1975)⁷で一般に知られるようになるが、田中はレフツ版(1927)⁸から翻訳して、1949年に『祖稿グリム童話全集』を出版している。この功績は高く評価されるべきである。彼はグリム童話をドイツ国民一般の思想感情を知る資料として高く評価していたのである⁹。

2) ⑭ 1914(大正3)年11月「燃屑姫」年岡長汀訳注『グリム十五童話 独話対訳』南江堂書店 G 原文に忠実訳

(1) 邦訳の概要

富豪の妻は臨終の床で娘に「信心深く正直」でいるよう言い聞かす。継母が来て娘をいじめる。灰色の古い上衣を着せ、木の靴を履かせる。継姉たちは娘を燃屑姫と呼んで酷使する。王が3日間の盛宴を張る。その準備に姉たちは娘に「扣子」〔原典：Schnellen(ベルト)〕を締めるよう依頼する。娘も城の宴会に行きたいと言うと、継母は小豆〔原典：Linse(ヒラマメ)〕を1皿こぼし2時間の間に拾えたら連れて行くと言う。娘は鳩に助けてもらって課題を成し遂げるが、服がないという理由で連れて行ってもらえない。娘は墓の榛の木に頼む。「樹木よ、身體を揺り動かして / 黄金白金を私の上に投げとお呉れよ。」すると、鳥が、黄金白金で飾った着物と絹に銀で刺繍した上靴を投げる。娘は大急ぎでそれを身に着けて宴会に行く。注目を浴びた娘は夜になったので暇乞いをする、王子と一緒に行くと言う。彼女は走って鳩小屋に飛び込む。父親が斧で壊すが、誰もいない。翌日娘は追いかけてくる王子を振り切るため梨の木に登る。王子の言葉を聞き、父は梨の木を切る。3日目は「立派で燦然たる」(prächtig und glänzend)服と「すっ

かり黄金」(ganz golden)の靴を身に着けて行く。夕方娘が帰ろうとすると、タールが靴にくっつき、金の靴が脱げる。靴合わせに王子が来ると、2人の姉は継母に「皇后様になると、もう歩く必要がない」と言われて、足の指や踵を切って無理やり靴を履く。王子が馬に載せて連れて行くと、墓の上の鳩に出血を指摘され偽物だと暴かれる。王子は家に引き返し、「お前達は他に娘を持って居ないのか」と聞くと、父親は「前の家内のわすれ形見の小さい畏縮けた燃屑姫がもう一人おります」と答える。靴が合い、娘が立ち上がると、王子は顔を見て、「自分と踊つた美しい姫であつた」ことを認める。継母と継姉たちは「吃驚して怨怒の餘り蒼白に」なる。王子と娘の結婚式が挙げられ、2人の継姉たちは教会への行列に付き添う。2羽の鳩が飛んで来て、姉たちの目を突き出す。「かくして二人はその意地悪と嘘つきの為に、罰をうけて、一生盲目となつた」で終わる。原文に忠実な訳である。

(2) 邦訳の分析

独和对訳であるので、原典に忠実な翻訳であるが、Linse をヒラマメではなく、小豆 (rote Bohne) と訳している以外は、グリムの原典に忠実な訳である。また、田中訳で「會堂」と訳されていた Kirche も「教会」と正しく訳されており、キリスト教の概念を改変することなく、そのまま邦訳して伝えている。年岡訳は非常に原文に忠実な訳であるといえる。

この対訳本には白黒の挿絵が入れられている。それは灰かぶりが階段を駆け下りる場面を描いたもので、オッフエンディンガー (Offending) によるものである。この挿絵が収録されている 1914 年以前のドイツ語版の書籍を調べた結果、下記の 3 冊 (A,B,C) が浮上した。

A. *Deutsche Kinder-Märchen; Zwölf Lieblingsmärchen für die Jugend: mit 72 Farbdruckbildern nach Aquarellen von Prof. C. Offendinger und H. Leutemann.* Stuttgart / Leipzig: Loewe 1884, S. 18-19. (この頁の間に挿絵)『ドイツの子どもの童話』

B. *Neues Märchenbuch: Eine Auswahl 30 der schönste Märchen für die Jugend: mit 8 Farbdruckbildern nach Original-Aquarellen von Prof. C. Offendinger und H. Leutemann.* Stuttgart: Effenberger 1887, S. 24-25. (この頁の間に挿絵)『新しい童話集』

C. *Mein erstes Märchenbuch.* Eine Sammlung echter Kindermärchen für die ganz Kleinen. Mit 24 feinen Farbdruckbildern von Prof. C. Offendinger und H. Leutemann. Stuttgart: Effenberger, neunte Auflage 1904 (1.Auflage Ende des 19Jh.). S. 12-13. (この間の頁に挿絵)『私の最初の童話集』

A は目次に Aschenbrödel. Nach Ludwig Bechstein mit 6 Bildern (灰かぶり、ルードヴィヒ・ベヒシュタイン版より、6 枚の挿絵入り) と表示されているが、内容はベヒシュタインではなく、ペロー版に近い。実母の臨終の場面や墓参りの場面 (G 版¹⁰) で始まり、年の市に行く父に榛の木を土産に頼む (G 版、B 版)。豪華な服や靴を出してくれるのは榛の木の白い鳥 (G 版、B 版) ではなく、名付け親 (P 版) であり、魔法の杖で西瓜 (P 版: 南瓜) や鼠を馬車や馬に変身させて、舞踏会に行かせてくれるというペロー版の内容を踏襲している。該当の挿絵は 18 頁と 19 頁の間に 5 枚一緒に入れられている絵の 4 枚目である。

Bは目次に Aschenbrödel (Nach L. Bechstein) と表示されているが、ベヒシュタイン版より、ペロー版に近い内容である。タイトルも「灰かぶり—あるいはガラスの靴」とペロー版に近い表現になっている。該当の挿絵は「灰かぶり」の頁ではなく、ハウフ童話「コウノトリになったカリフ」の頁に入れられている。

Cは目次に Aschenbrödel とのみ表示されている。実母の臨終の場面や墓参りの場面、年の市に行く父に榛の木を土産に頼む場面、継母がレンズマメを時間内に拾う課題を出し、灰かぶりが成し遂げたのに連れて行かず、置き去りにする場面まではグリム版である。その後、彼女に援助の手を差し伸べるのは、榛の木ではなく、名付け親の妖精である。つまり、この場面からペロー版の内容になるが、異なる点が2点ある。南瓜ではなく、西瓜 (Melone) を馬車に変身させる点、ガラスの靴を出すのが妖精ではなく、小鳩である点である。ペロー版同様、彼女は継姉たちを許し、王子と結婚し幸せに暮らす。グリム版の小鳩による眼球除去の制裁はない。挿絵は該当のもののみ「灰かぶり」の話の2頁目に入れられている。

挿絵が入っているABCの3冊はいずれも年岡の底本ではない。年岡の対訳本に書かれたドイツ語はグリム原典に忠実なものである。おそらくグリム版の決定版に忠実な内容のドイツ語本から直訳したものであろう。挿絵のみ上記のABCの本から取ったと思われる。もしかしたら、「灰かぶり」の話と絵が一致しているCから取ったのかもしれない。

(3) 訳者について

年岡長汀は筆名で、実名は年岡鷹市(生没年不明)であり、岡山県出身で1911(明治44)年7月に京都帝国大学文学部獨文学専攻を卒業した人物である¹¹。その後、第二高等学校教授になるが、1922(大正11)年4月5日に退職する。「正七位」だった彼は退職の際「従六位」に叙されている¹²。後に彼は尾島と改姓する¹³。

年岡は京大の学生時代に上田敏教授とともに京都文学会発行の『芸文』(金尾種次郎編)の編集に従事していた¹⁴。上田敏の教え子である彼が¹⁵、グリム童話の独日対訳本を出したのは当然の成り行きと思われる。なぜなら、上田敏は東海生という筆名で、グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」を最初に日本に紹介した人である可能性が高いからだ¹⁶。

3) ⑮ 1915(大正4)年6月23日 星野辰男訳 水晶の靴(灰娘)『セーヌの流』通俗図書中央販売書 P 原文にはほぼ忠実訳

(1) 邦訳の概要

姉は娘を「お鍋さん」とよび、妹は姉ほどいじわるでないで「灰娘さん」とよぶ。泣くと女神が現われる。女神は銀の杖で西瓜を金銀の馬車に、6匹の二十日鼠を栗毛の馬に、大きな鼠を御者に、6匹の縞蛇を給仕に、娘のボロ服を金銀の輝く夜会服にし、水晶の靴も出してくれる。「若し一、二秒でも十二時が過ぎる」と、魔法が解けて元の姿に戻るので、必ず12時までには帰ると娘に約束させる。若い宮様は彼女とだけ踊る。灰娘は「十一時四十五分」に退出する。2人の姉妹は「王子が世の中に寶の山を積んででも其のお姫様の生立を知りたい」と言っていたと、灰娘

に伝える。2 日目は時計が 12 時を打ち始めると、「少女は^{せうじょ}大層^{たいそう}驚^{おどろ}いて、[…]^め牝鹿^{じか}の飛^とぶよりも早く^{すばや}走^{はし}つて」逃げ出す。あまり急いだので、少女は水晶の靴を片方落したまま立ち去る。継姉たちが水晶の靴を試した後、灰娘が試すとうまく足に合う。彼女がポケットからもう片方の水晶の靴を出して履くと、女神が出現して銀の杖で彼女に触れる。彼女の服は立派な衣装に変わる。2 人の姉は灰娘の膝に取りすがって泣き伏し、今迄の意地悪を詫げる。灰娘は姉たちに接吻して赦し、愛してくれるよう頼む。灰娘は王子と結婚式を挙げる。「灰娘は其の^{はいむすめ}顔^そ貌^{かほ}の美^{うつく}しい許^{ばか}りでなく、其の心^{こゝろ}も實^{じつ}に美^{うつく}しい方^{かた}ですから」継姉たちも宮中に呼び、立派な殿方と結婚させて世話してやる。（ペロオ全集）

（2）邦訳の分析

実子の娘がいじめられていることを父親に言い付けない理由が書かれていない。ペローの原典では「お父様はお母様のいいなりになっていたから」と書かれている。上の姉さんは娘を「お鍋さん」（原典：キュサンドロン＝灰だらけの子）と呼ぶが、さほど意地悪でない下の姉さんは「灰娘さん」と呼んだと改変されている。服にかけるアイロンが「火^ひ熨^の斗^し」と表現されている。ペロー版では髪結さんに「髪を二列に高く結あげ」、「上等のつけぼくろ」を買いにやらせるが、髪型の要求は省略され、「一番上等の雉子の羽子」を買いに行かせると改変されている。当時のフランスの流行の髪型や美顔術は日本の読者には理解できないと考えたのであろう。名付け親の妖精は女神に、南瓜は西瓜に、蜥蜴は縞蛇に改変されている。魔法をもたす杖は銀の杖になり、ガラスの上靴は水晶の靴になっている。王子からもらって姉たちに分けてやる「オレンジやレモン」が「蜜柑やシトロン」になっている。ペローの原典にある教訓は省略されている。全体に人の名前や野菜や動物などの名が和名に改変されている。しかし、南瓜が西瓜に改変され、蜥蜴が縞蛇に改変された理由については不明である。

（3）邦訳者の概要

星野辰男（1892-1968）は、作家、翻訳家で、『アサヒグラフ』の編集長を務めていた。保篠龍緒という筆名で小説を発表する。東京外国語学校仏語科を卒業後、文部省に入り通信教育調査委員となる。その後朝日新聞社に転入し、1927 年から「アサヒグラフ」の編集長を経て、朝日新聞社編集部長、日本映画社常務理事を歴任する¹⁷。ルブランの「怪盗ルパン」に魅せられ、1929 年から 1930 年に『ルパン全集』（12 巻＋別巻 2 巻）を個人訳で平凡社から刊行し、「怪盗ルパン」を日本に定着させる¹⁸。文部省の役人時代は立場上、本名で翻訳活動にあたることを憚り、本名の漢字を入れ替えて筆名とした。日本で著作権法が 1971（昭和 46）年 1 月 1 日に施行されるより以前に、彼は著者ルブランに翻訳権料を支払い、正式に権利を取得したうえで翻訳していた。格調高い名調子で訳された彼のルパン訳は多くの人々に愛され「ルパンといえば保篠訳」という時代が続いたという¹⁹。

4）⑩ 1915（大正 4）年 10 月 7 日 燃屑姫 藤沢^{もりひこ}衛彦訳『通俗グリム童話物語』通俗教育普及会出版局 G 原文に忠実訳

(1) 邦訳の概要

「奥付」には通俗教育普及会編と記載され、訳者名は未記載であるが、「緒言」で「著訳者 藤沢衛彦」と明記されている。グリムの原典に忠実な訳であるが、⑭の年岡訳をほぼそのまま踏襲したと推測する。表現が酷似しているからである。最初の実母の臨終の床での言葉も「信心深く、正直に」であり、年岡訳と同じである。娘が榛に頼む言葉も年岡訳と酷似している。年岡訳では「樹木よ、身體を揺り動かして / 黄金白金を私の上に投げとお呉れよ。」藤沢訳では「榛の木よ、その身體を揺り動かして / 黄金や銀を、私に投げかけておくれ。」ようするに、藤沢は年岡訳をほぼそのまま踏襲したのである。しかし、異なる箇所もある。たとえば、年岡訳では「彼」という代名詞が女性に対しても使用されているが、藤沢訳では代名詞が使用されず、名詞が繰り返されている。日本語には3人称の女性を表す代名詞がなく、彼という語を男女ともに用いていたという。「彼女」は「かの女」から転移したもので、翻訳上の必要から明治の末頃に作られたものである²⁰。しかし、明治末や大正期の文学ではまだまだ女性を「彼」と表現しているものが多く存在したという²¹。

(2) 邦訳の分析

年岡訳を踏襲したと思われる箇所をA～Gで表記し、異なる箇所をa～fで表記する。塵まみれで垢に汚れていたのも、姉妹たちは娘のことをA「燃屑姫」と呼ぶ。娘は父の土産の榛の枝を母の墓に植え、涙がかかって、B「お墓が濕ふほど」泣く。あるとき、王がC「盛宴を張る。」姉は娘にD「^{ほたん}扣子」〔原典：ベルト (Schnellen)〕を締めるよう頼む。E「夜会」〔原典：舞踏会 (Tanz)〕に行く。継母が灰に撒くのはF「小豆」〔原典：ヒラマメ (Linse)〕と誤訳している。良い豆はG「瓶」〔原典：鍋 (Töpfchen)〕に、悪い豆は胃袋にと7点もの誤訳もそのまま踏襲している。

年岡訳と異なる箇所は下記の6点である。娘はa「光つた靴のかはりに」、木の靴を履かされると原典にない表現が付加されている。榛に来るのはb「白い鳩」とされているが、年岡訳と原典では「白い鳥」(weißes Vöglein)である。榛の出す靴の素材c「絹や銀」の表記がなく、「立派な」とのみ表記されている。娘にd「彼」という代名詞を使用せず、「燃屑姫」と名詞を繰り返している。一方、年岡訳では娘を「彼」と表現している。結婚式の際に行く場所はe「都会」と誤訳しているが、年岡訳では「教会」と正しく訳されている。全体に原文に忠実な訳であるが、年岡訳を踏襲した可能性が高い訳である。

(3) 邦訳者の概要

藤沢衛彦(1885-1967)は1909(明治42)年に明治大学文科を卒業し、1914(大正3)年に日本伝説学会、1922(大正11)年に日本童話学会、1926(大正15)年に日本童話作家協会、日本風俗史研究会を設立する²²。その後、1932(昭和7)年に明治大学教授となり風俗史学や伝説学を教える。1946(昭和21)年には社会科の新聞科専任となり、1958(昭和33)年に定年退職する²³。その間、日本児童文学者協会創立に参画し会長を務める。著書に『日本伝説叢書』『日本伝承民俗童話全集』(全6巻)『日本民族伝説全集』(全10巻)などがある²⁴。

藤沢はドイツ語が理解できなかった可能性がある。なぜなら、「緒言」でグリム兄弟の兄の名 Jacob（ヤーコブ）をジャコブ、弟 Wilhelm（ヴィルヘルム）をウイルヘルムと英語読みで表記しているからである。また「ドイツ語辞典」（*Deutsches Wörterbuch*）を *Deutsche Wörterbuch* と誤記し、ライン（Rhein）川をナイン川と誤記し、Cassel を Hessen ではなく、Prussia に属すると誤記している。

出版社の通俗教育普及会は、学校教育を補完すべきものとして登場したもので、「家庭の師となり、友となり、話し相手とならんとして」刊行されたものだという²⁵。就学率が低迷するなか、その向上を期するためには親権者に教育とは何か、学校とは何かということを理解させるために設立されたものだという²⁶。

5) ⑰ 1916（大正5）年5月8日 中島孤島訳 岡本帰一画 消炭さん『グリム御伽噺（新訳）』
富山房 G 原文に忠実訳

（1）邦訳の概要

臨終の床で実母は娘に「正直に、温順くするんですよ […] 私も天で見てみて、始終お前のことに気をつけてみますからね」と言う。2人の継姉たちは「顔は白くて綺麗でしたが、心は黒く、拗ねてみました。」娘のことを「鶯」〔原典：鶯鳥（Gans）〕と馬鹿にし、竈の灰の中で寝るので、「消炭さん」と呼ぶ。娘は父親に、帽子に触った〔原典：突き落とした（*stieß ihm den Hut ab*）〕榛の枝を土産に欲しいと言う。娘は枝を墓に植えて、日に3度、榛の木の下で泣く。継母は灰に撒いた空豆を時間内に拾うよう命じる。娘は2回とも課題を成し遂げますが、夜会に連れて行ってもらえない。全員出かけてから、娘は母の墓に行き、榛に願いを言う。「大切の／＼私の木、サラサラと動いて / 金と銀を落としてお呉れ。」すると鳥が金銀の服と銀で飾った絹の上靴を落としてくれる。それを身に着けて娘は舞踏会へ行く。

娘は王子と夕方まで踊り、立ち去る。王子がついてくるので、鳩小屋に飛び込む。王子が父親に言いつけると、父親は鳩小屋を斧で割る。2回目は娘が大木に登る。美しい実〔原典：Birnen（梨の実）〕が房々となった見事な大木に栗鼠のように上手に登るのである。王子は娘を捕まえるため松脂（瀝青＝チャン）を道に塗る。娘は左の純金の上沓が脱げて、道に落としてしまう。王子がその靴を持参して、彼女の家に来る。2人の姉たちは靴を試すが、出血してしまう。父はもうひとりの娘を「先妻の娘ですが、これは花嫁になるやうなではありません」〔原典：ist noch ein kleines verbutetes Aschenputtel da（小さくて発育不良の灰かぶりがいるだけ）〕と言う。王子はその顔を眺めて「これが、本当の花嫁だ」と言う。教会へ行く結婚行列に加わった継姉たちは鳩に目を突かれ、「悪い事をした報で、とう／＼盲目になって、悲しい一生を送りましたと、さ」で終わる。

（2）邦訳の分析

原典にかなり忠実な訳である。実母が言い聞かす言葉は原典では「信心深く、よい子」（*fromm und gut*）だが、ここでは「正直に、温順く」になっている。信仰がらみの表現を避けて、「正直」

に置き換えている。「信心深い」を「嘘偽りなく生きること」と表現しているのは、神の意向に沿う生き方を噛み砕いて表現しているのであろう。鶯鳥を鶯と書いて(あひる)とルビを打っている。アヒルとガチョウはどちらも白い鳥で似ているが、瘤があるのが鶯鳥で、瘤がないのがアヒルである。灰に撒くヒラマメ(レンズマメ Linse)が空豆と訳されているが、レンズマメはマメ科ソラマメ連に属するので、誤訳とはいえない。父親が実子のことを原典では「小さくて発育不良」言うが、ここでは「花嫁になるようなのではない」と、婉曲的表現にとどめている。意地悪な姉たちが鳩に目を突かれて盲目になることは省略されず、原典通り訳出されている。ポルスターの挿絵から判断すると、ティロ・ルイケン編『グリム兄弟により収集された童話集』²⁷を使用したかのである。1911年に出版されたグリム原典に忠実な選集で、111話収めた選集本である。しかし、この本は挿絵画家の岡本が使用しただけで、筆者が「赤ずきん」の受容論で明らかにしたように、中島はドイツ語版からではなく、英語版から重視した可能性が高い²⁸。

(3) 邦訳者の概要

中島孤島の実名は中島茂一(1878-1946)で、長野県出身である。1899年に東京専門学校(現早稲田大学)の文学科を卒業し、翌年『明星』に評論を発表する。坪内逍遙の門下生としてシェイクスピアを研究し、文学評論や海外文学の紹介などを新聞や雑誌に執筆し、『新小説』の「海外文壇」欄を担当する。明治末に文芸革新会を組織するが、その後文壇から離れ、児童のために海外作品の翻訳に専念する²⁹。小説家、評論家、翻訳家である。

(4) 挿絵画家の概要

岡本帰一(1888-1930)は黒田清輝の白馬会葵橋研究所で絵を学び、芸術座の舞台装置を手がけ、新劇協会ではメーテルリンクの「青い鳥」描いて注目される。児童向け雑誌『金の船』(のち『金の星』)、『コドモノクニ』などに童画家として活躍する³⁰。

ここでは最初に赤いスカートをはいた消炭さんが、墓に向かって祈っている後ろ姿の挿絵が描かれていて、右上にK.OKAMOTOとサインがあるので、挿絵画家は岡本帰一であることがわかる。鳩が両腕に載っている墨絵(98頁)とスカートが花のように開いた消炭さんの絵(109頁)も岡本とのものと思われるが、これはドイツの挿絵画家、ドーラ・ポルスター(Dora Brandenburg-Polster 1884-1958)が下記の本に入れた挿絵を盗用したものだ。*Deutsche Märchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Mit vielen Bildern von Dora Polster.* Hrsg. v. Thilo-Luyken, M. Published by Ebenhausen, Langewiesche-Brandt, 1911. S.119, 123.

6) ⑱ 1916(大正5)年6月5日 少年通俗教育会(新井弘城)訳「踊り靴」『幼年百譚 お話の庫』春の巻 博文館 P 原文改変版

(1) 邦訳の概要

英国のある町にお花という美しい娘がいたが、二度目の母はお花より年上のお鳥という娘を連れてくる。お鳥姉さんは意地悪をしてお花を酷めるので、お花は毎日泣き暮らしている。或る日、王の御殿で舞踏会があるから家の者たちも来るようにという知らせが届く。お鳥姉さん

と継母は行くが、お花は衣装がないから連れて行ってもらえない。娘が泣いていると、美しく気高い女神が現われて、行かせてやると言う。女神が右手の鞭を当てると、南瓜は馬車に、娘の衣服は目の醒める様な美しい衣服に、6匹の鼠は4匹の馬と2人の馭者に変身する。女神は土産に「甘藷」持たせて娘を御殿に行かせるが、12時までには帰宅するよう忠告する。1日目は12時までには帰宅するが、2日目は12時の鐘が鳴ってから御所を飛び出し、「硝子の踊靴」を落としてしまう。王が拾いあげ、この靴の履き手を后にすると。それを聞いて英国中の娘が御所に押しかけ靴を試すが、華奢な足を持つ者は誰もいない。なかには足の肉を切り取って履こうとする者もいる（G版）。連れ子の娘もそのひとりであった。お花が汚い服で来ると、王は服が汚いので靴を履くのを許可しない。娘が履くと合致したので、王は吃驚する。そこに女神が現われ、鞭でお花の着物に触ると、お花の衣服は昨夜と同じ立派なものになる。王の不審感を取り除かれ、お花は目出度く王の后になる。

（2）邦訳の分析

フランスでもドイツでもなく、英国の話になっている。話の細部まで類似しているのは、昨年度の拙論で紹介した、⑥1889（明治32）年8月に出版された白雨楼主人（増田丘一）訳「英国お伽噺 踊靴」（『少年世界5(17)』収録 博文館）である。土産に甘藷を持参するという改変は、この訳本にしか存在しない。前回の論文で白雨楼主人の実名が増田丘一であることを突き止め、おそらく精神科医であろうと記載した。しかし、再調査の結果、文献が見つかり、増田は医者ではなく、学校教員から生命保険会社の編集主任に転職した人物であることが判明した³¹。増田は海外留学後に体調を崩し、一時期学校教員をしていたが、その後、雑誌編集者を経て、保険会社の編集主任になる。増田訳をほぼそのまま踏襲しているのがこの新井弘城訳である。土産に甘藷を持参するのは増田訳を踏襲したからか、あるいは訳者新井弘城の出身地舞鶴の名産品が「京甘藷」であるからか、いずれかであろう。

増田訳と異なる点は4点ある。1点目は実子に「お花」、継姉に「お鳥」という名をつけている点である。増田訳では実子を「孝行娘」、継姉を「連れ子の娘」と記載している。2点目は英国中の娘が御所に押しかけ靴を試す際、足の肉を切り取って履こうとする者もいて、連れ子の娘もその1人であったという点である。増田訳ではその後、「血がばた／＼と滴りまするので、一遍に王様に見頃はされまして、散々にお小言を食ひまして退きました」と付け加えられている。3点目は王が後にしたいのは新井訳では「好い靴」の持ち主であるが、増田訳で「華奢な靴」の持ち主である。つまり、増田訳では結婚を決めたのは、女性の身体的魅力であるが、新井訳では女性の財力であるということになる。それゆえ、汚い服を着ている者には靴の試着を許可しなかったであろう。4点目は王の住居は増田訳では「御所」だが、ここでは「御殿」である。「御所」は天皇や上皇などの住まいを指すが³²、「御殿」は豪華な邸宅一般を指す言葉である³³。英国の話なら御所より御殿と訳す方がCastleの意味に近いが、「城」という訳語は使われていない。

（3）邦訳者の概要

訳者は少年通俗教育会とされているが、春の巻の緒言に「記事の大部分は、幼年世界記者新井

「弘城君の執筆を煩したものが多いのです」³⁴と編者が書いているので、新井弘城だと推測する。新井弘城というのは筆名で、実名は南部新一(1894-1986)である。彼は京都府舞鶴出身で、少年時代から巖谷小波に憧れる³⁵。南部は1915(大正4)年に博文館に入社し、『幼年画報』『幼年世界』の編集にたずさわる。1926(大正15)年には『少女世界』の編集長として、1928(昭和3)年に退社するまで博文館の児童文学雑誌編集の中核を担う³⁶。その後、青蘭社を起し、第二次世界大戦後はポプラ社にも関係する³⁷。南部は児童文学界に多くの作家を登場させただけでなく、自らも執筆活動に励み、名実ともに児童文学に生涯をかけた人物である³⁸。

7) ⑨ 1919(大正8)年7月18日「消炭娘」少年通俗教育会著『グリム物語 世界童話』博文館 G 原文にほぼ忠実訳

(1) 邦訳の概要

実母は臨終の床で娘に「何でも正直に、温順をとなしくするんですよ […] 私も、天で見てゐて、始終、お前の事に気をつけてゐるからね」と言う。娘は毎日お墓参りをして泣く。遺言通り「正直に、温順をとなしく」している。継娘たちは、顔は白くて綺麗だが、心は悪くひねくれ者だった。娘を鷲がと呼び、立派な着物を剥ぎ取って、古ぼけた鼠色くつの上衣を着せ、足には木沓くつを穿かせる。姉たちは灰の中に豆を撒いて、娘に拾わせる。娘は竈の灰の中へ寝かされたので、「消炭さん」と呼ばれる。父に土産として、帽子に触った榛の枝を頼む。娘は日に3回墓参りをし、榛の木の下で泣く。継母は桶一杯の空豆を灰に撒き、2時間以内に選り分けたら連れて行くと言う。娘は鳩の力を借りて2回とも課題を成し遂げる。娘は母の墓に行き、榛に願掛けをする。「大切だいじの大切だいじの私の木、さらさらさらとゆれ動き、金と銀とを落してくれ」と言うと、鳥が来て金銀の着物と、銀の飾りのある絹の上靴を落としてくれる。消炭さんはそれを着て舞踏会に行く。夕方、娘が暇乞いをする、王子が後からついてくるので、娘は鳩小屋に飛び込む。王子が父親にそのことを言うと、父親は鳩小屋を斧で割る。2回目には娘は大きな木(梨の木)に登る。王子の発言を受け、父親は大木を切り倒す。娘が榛に願掛けをすると、1回目は銀の飾りのある絹の上靴を、3回目は純金の上沓を落としてくれる。娘に追いつけない王子は、道中一面に松脂れきせいを撒かせておいたので〔原典: die ganze Treppe mit Pech bestreichen lassen (階段一面に瀝青を撒かせておいたので)〕娘の左の黄金の上沓が脱げる。王子が靴合わせに来ると、姉たちは拇指や踵を切って無理やり足を靴に入れる。王子は花嫁だと思って連れ帰るが、榛の木の鳩が出血を指摘して偽物だと知らせる。他に娘はいないかと王子が聞くと、父親は先妻の子の「消炭さん」がいるが、とても花嫁になるような者ではないと言う。王子がその娘に靴合わせをすると、びたりと合う。王子は消炭さんを「一心に」眺めて、「本當の花嫁だ」と言う。結婚のため教会に行く行列に加わっていた姉妹は、2羽の鳩に両目を啄かれ、「悪い報ひで盲目となり、不幸な一生を送りました」で終わる。

(2) 邦訳の分析

博文館出版で少年通俗教育会著とされているこの話は、グリム版とペロー版を折衷させた⑮新井弘城訳ではなく、グリム版に忠実な⑯中島孤島訳を踏襲したものと判断する。訳文の内容が意

訳も含めて酷似しているからである。実母が臨終の床で娘に言い聞かす言葉も中島同様、「正直に、^{おとなし}温順く」であり、娘を「鶯鳥」ではなく、「鶯^が」と呼んでいる点もそうである。中島はルビを「あひる」と入れているが、ここでは「が」と入れられている。娘の立派な服を剥ぎ取り木の靴を履かすと、次の言葉で娘をからかう。「気位の高いお姫様を見てよ、うまきおめかししてる」(Seht einmal die stolze Prinzessin, wie sie geputzt ist)。ここでも中島訳をそのまま踏襲して、「お姫様のように威張つたつて、其の様ではもう駄目だわ」と意識している。灰に撒く「レンズマメ」も中島訳同様「空豆」と訳されている。灰まみれの娘を「灰かぶり」ではなく、「消炭さん」と呼ぶのも中島訳と同じである。送ると言う王子を振り切って、鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に登ったりする箇所も中島訳と同じである。父親が実子のことを原典では「小さくて発育不良」と言うが、ここでは「花嫁さんになるやうな者ではありません」と中島訳同様、婉曲的表現にとどめている。意地悪な姉たちが鳩に目を突かれて盲目になることも省略されず、「姉妹は悪い報ひで盲目となり、不幸な一生を送りました」という訳も中島訳と同じである。

(3) 邦訳者の概要

少年通俗教育会著とあるが、邦訳内容からみて中島孤島が訳したか、あるいは他の人が中島訳を踏襲して書いたものと推測する。

8) ② 1920 (大正 8) 年 9 月 12 日 巖谷小波訳 ^{こがね}黄金の靴『教訓お伽夜話 前編』博文館 G 原文改変版

(1) 邦訳の概要

殿と奥方の間に美しい姫がいて大切に育てられていたが、姫が「十七八」の頃、奥方が病で死ぬ。父は再婚し、新しい奥方は 2 人の娘を連れて来る。いじめられて亡き母の墓前で姫が泣くと、2 羽の白鳩が来る。王が国中の美人を集めて舞踏会を開く。王子の花嫁を探すためである。継母は 2 人の継娘を連れて舞踏会に行く。置き去りにされた姫は墓前で泣いて祈ると、木に止まった 2 羽の白鳩が金の上靴と金銀宝石で飾られた立派な着物を落としてくれる。姫は「あの世に居るお母様が、私を助けて下さるのだろう、本当に有り難い嬉しい」と思い、着替えて王宮へ向かう。王子と舞踏をしてから、姫が暇乞いをする、王子は帰宅を許さない。姫は無理やり王子の手を離し、庭から逃げる。あまり急いだったので、片方の金の靴を落としてしまう。王子は金の靴を拾い、この靴に合う足の娘を花嫁にすると宣言する。あらゆる女性に靴を履かせるが、誰の足にも合わない。継姉たちは足の指を切って靴を履こうとしたが、足から血が出て悪事がばれてしまう。他に娘のいる者は、直ちに呼べと王子が命じたので、姫が呼び出される。姫は乞食同然の汚い服を着ていたが、「王子は一目見るなりちゃんと承知して居て、^{すぐ}直と靴を穿かせて御覧になりますと、見事に合いましたので、早速花嫁に取り立て、盛んな御婚禮をなさいました。」その後 2 人が馬に乗って散歩に出かけると、2 羽の鳩が現われて、「お妃の肩に止りながら、さも嬉しうにホウ／＼と鳴きました」で終わる。

(2) 邦訳の分析

灰かぶりの父はここでは殿様であり、彼女は姫である。彼女の年齢は原典では書かれていないが、ここでは17歳か18歳だと明記されている。しかし、名前は表示されていない。姫を舞踏会に行かせてくれるのは墓の木に止まっている2羽の白鳩であり、美しい衣装と金の靴を落としてくれる。鳩は母の化身であることを、姫は承知している。3回ある舞踏会は、1回に省略されている。王子が追いかけてきて、姫が鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に登ったりするエピソードは削除されている。階段に撒かれたチャンに靴を取られるのではなく、姫が慌てたので庭に靴を落とすとされている。王子は姫が貧しい身なりをしていても「踊った相手」であることを見抜く。継姉たちは足の指を切って靴を穿き、出血して嘘がばれるというエピソードは入れられている。原典では鳩が継姉たちの目を突つき出して盲目にするが、ここではその文章は削除され、継姉たちの悪事に対する天罰は与えられないで終わる。代わりに散歩の際、2羽の鳩が現われ、姫と王子の結婚を祝福しているという表現が入れられている。主人公は姫とのみ表記され、最後まで名前が表示されない。

(3) 邦訳者の概要

巖谷小波の実名は巖谷季雄(1870-1933)である。彼は独逸学協会学校を1888(明治21)年9月に卒業するが³⁹、医学の道を歩まず、文学の道を志し、尾崎紅葉らの硯友社に入る。1891(明治24)年に『少年文学』第1編として刊行した子ども向けおとぎ話『こがね丸』は、日本で最初の創作児童文学とされる。4年後に『少年世界』を創刊して多くのお伽噺を発表する。『日本昔噺』の刊行で民話や英雄譚を再話して普及させたので近代児童文学の生みの親と言われる。明治30年代の後半からは童話口演の全国行脚も行い、全国の子どもにも親しまれる。雑誌『少年世界』を出し、大正時代から昭和初期にかけて活動した日本の演劇評論家、編集者、翻訳家、児童文学者である⁴⁰。

9) ㉑ 1920(大正9)年9月30日 楠山正雄訳 森田久画「サンドリヨンの^{はなし}話 - 又の名ガラスの上靴^{うわぐつ}」『驢馬の皮』世界童話名作集 第1篇 家庭読物刊行会 P 原文にはほぼ忠実訳

(1) 邦訳の概要

娘はサンドリヨンというあだ名をつけられる。「これは灰のかたまりとか、消炭とかいふことです。」王子が大舞踏会を催して、「幅^{はば}の利くとうさんの娘^{むすめたち}達」も招待された。姉はフランス飾りのついた赤いビロウドの着物、妹はいつもの袴、金の花のマント、ダイヤモンドの胸あてを身に着けて出かける。サンドリヨンが泣いていると、名付け親の教母が現われ娘を助ける。教母は妖女であり、杖を振って南瓜を金ぬりの立派な馬車に、6匹の小鼠を鼠色の馬に、大鼠を御者に、6匹の蜥蜴を馬丁に、サンドリヨンの服を「寶石をちりばめた金銀の衣装」に変身させ、ガラスの上靴を与える。教母は娘に夜中までの帰宅を厳命する。「王子はサンドリヨンの顔ばかりながめて」食べ物^{うわぐつ}が喉に通らない。

サンドリヨンは王子からもらったオレンジやレモンを姉妹に分けてやり、「十二時十五分前」に城を出る。彼女はシャルロットに普段着の黄色い着物を貸してくれと頼むが断られる。2回目

は、時計が「十二打ったのでびっくりして、牝鹿のやうにはしつこく駆け出し」し、ガラスの上靴を片方落とす。王子はその靴を王女や貴族の娘たちに試着させるが、合う者はいない。2人の姉妹にも合わない。サンドリヨン「つひ笑いだしてしまつて、貸してごらんなさい。わたしにはまるかも知れないから」と言う。お役人は「顔をみて、これは大そう美しい姫だと思ひましたから」試着させる。靴は「まるで蠟でかためたやうにびつたりついてしまひました。」サンドリヨンはもう片方の上靴を取り出す。教母が現われ、杖でサンドリヨンの服に触れると、前よりも「一層美しい立派な衣装に」変わる。2人の姉妹はサンドリヨンに罪を詫げる。サンドリヨンは2人に、これからはやさしくしてくれるよう頼む。サンドリヨンは立派な衣装を着たまま王子の御殿へ行く。「四五日して」御婚礼の式があげられる。「サンドリヨンは顔が美しいと同様に、心のやさしい娘でしたから、二人のきやうだいをもお城へ引きとつてやつて、御婚禮のその日にやはり二人の貴族と目あはせることにしました」で終わる。

(2) 邦訳の分析

父親は「不自由なくくらしていゐる紳士」（原典：身分の高い人）であり、「すつかり継母にまるめこまれて居て」（原典：お母さまのいいなりになっていて）、実の娘が消炭（原典：灰だらけの子）を意味するサンドリヨンと呼ばれて苛められていても助けてやらない。王子が舞踏会を開き2人の姉妹も「幅の利くとうさんの娘たち」（原典：立派な家柄の人）だったので招待された。名付け親の教母は妖女（原典：名付け親の妖精）で、サンドリヨンを舞踏会に行かせてくれる。王子はサンドリヨンの顔ばかり見ている。帰宅後姉妹たちに舞踏会の話聞いて、自分も行きたいから、シャルロット（原典：ジャボット）に普段着の黄色い服を貸してくれと頼むが断られる。ガラスの靴を履くとき、サンドリヨンはつひ笑いだしてしまつて（原典：ほほえみながら）「貸してごらんなさい。私にはまるかも知れから」（原典：はいるがどうか、わたしもためしてみたいわ）と言う。サンドリヨンが王妃になることがわかると、姉妹は彼女に謝る。サンドリヨンは許してやる。結婚式は「四五日後」（原典：数日後）に挙げられ、姉たちも彼女の斡旋で貴族たち（立派な殿さま）と結婚させてもらうという原典と同じ終わり方をする。全体的に表現が噛み砕かれ、子どもにもわかるよう配慮されている。

(3) 邦訳者の概要

楠山正雄（1884-1950）は、大正から昭和にかけて活躍した日本の演劇評論家、編集者、翻訳家、児童文学者である。1906年早稲田大学英文科を卒業後、早稲田文学社に入り、島村抱月指導のもとで『文芸百科全書』（1909）を編集する。1909年に読売新聞社に入り、1911年に富山房に転社する⁴¹。1913年に早稲田大学の講師になるが、2年後に辞任する。1913年に入った島村抱月の芸術座で翻訳や脚色に尽力し、抱月の死後は画家岡本帰一と協力して1915年から『模範家庭文庫』24巻を編集する。同文庫で『イソップ物語』『世界童話宝玉集』『日本童話宝玉集』など続々と発表し、児童図書に新風をもたらす。日本童話作家協会の創立にも尽力し、富山房の『日本家庭大百科事彙』『国民百科大辞典』の編集にも携わる⁴²。

(4) 挿絵画家の概要

森田久(1890-1971)は福岡県出身で早大専門部政経科を卒業後、福岡日日、朝日、時事新報、九州日報と多くの新聞社に籍を置いた新聞人である。1936(昭和11)年には旧満州に招かれ、「株式会社弘報協会」の理事長となる。同協会は旧満州国と満鉄が作った国策機関で、各新聞や通信社の株式を全部保有することにより新聞や通信を統制していた。その後、満州国通信社社長を務め、戦後の追放解除後は夕刊フクニチ新聞会長、福岡県太宰府町長を歴任する。新聞記者の森田は文章だけでなく、絵心もあり、多くの児童雑誌の扉絵や挿絵も手掛けている。大正期には『少年世界』、『婦人世界』、『新家庭』、『婦人界』、『婦女界』など多くの児童雑誌や婦人雑誌に口絵や挿絵を描いている⁴³。

10) ② 1923(大正12)年12月「爐邊の乙女」若目田三郎『長靴をはいた猫』目黒分店 P 原文にはほぼ忠実訳

(1) 邦訳の概要

紳士が2度目の細君をもらう。細君と2人の姉妹は高慢で、気だての優しい実の娘をいじめる。実の娘は家中の嫌な仕事をさせられ、寝るのは屋根裏の物置で藁布団の中である。継姉たちは「寄木細工の床があり、ふつくりとした寝臺」に寝る。実の娘は父親に告げ口をしなかった。なぜなら、父親は「二度目の細君にまるめられてゐて、かへつて自分の娘をしかり飛ばす」だけだからである。娘はストーブの側の灰だらけの所に座るのがくせで、灰娘と呼ばれたが、少し優しい妹娘だけは「爐ばたの娘」と呼んだ。しかし、汚い着物を着た娘のほうが、「おごりにおごつた着物」を着た姉妹よりはるかに美しい。「二人の娘も其の國では中々威張つてをりましたから」、王子のお招きにあずかる。実子は姉たちの着物に火熨斗^{ひのし}をかけたり、袖口に飾りをつけたりする。姉たちは顔に美人斑^{ムーシユ}(「二三百年前には女が顔の色を白く見せるために態々^{わざわざ}顔面に黒い絹の切端などをはつたものです。それをムーシユといふのです。」)を買いにやらせる。姉たちは2日間ご飯を食べなかった。ほっそりとさせるためである。皆が舞踏会に出かけて、爐ばたの娘が泣いていると、教母(名付け親だが、ここでは娘を守ってくれる魔女)が現われる。舞踏会へ行きたいと言うと、「おまへはこれから先も優しい娘でゐませうね」と念を押して、舞踏会へ行かせてくれる。魔女は杖で、南瓜を金色の馬車に、6匹の栗鼠^{りす}を茸毛の馬に、鼠を御者に、6匹のとかげを従者に、娘を金銀寶玉の着物姿に変身させ、玻璃^{がらす}の靴を与え、12時前に帰宅するよう命じる。王子は御馳走を一口も食べない。「お姫様は例の二人の娘」に王子からもらった果物を与える。「爐ばたの娘は十一時四十五分の時計の音を聞き」退出する。帰宅して家でヂヤボットに黄色い普段着を貸してくれと頼むが、断られる。2回目は「十二時の最初の時計の音が鳴るのを聞き」、灰娘は「牝鹿の様に身輕に」立ち去るが、玻璃^{がらす}の靴を片方落としてしまう。靴を持参した役人に、灰娘は笑いながら、「其の靴が私に丁度いいかどうか、ためして見とうございます」と言う。2人の姉妹は笑い出して馬鹿にするが、役人は娘が大層美しいので許可する。靴は「丁度、蠅でつけた様にきちんと」足に合う。灰娘はポケットからもう片方の靴を出して履く。そのとき魔女が現われて杖で触ると、娘の着物は立派な着物に変わる。姉たちは床にひれ伏して謝る。娘は姉妹を許し、

これからは自分を可愛がってくれるよう頼む。娘は王子と結婚し、姉妹を宮中に住ませ、えらい役人と結婚させる。

（2）邦訳の分析

父親が継母に丸め込まれて自分の娘につらく当たるということを書いている。灰娘とよばれているが、妹娘だけは少し遠慮して「爐ばたの娘」とよぶ。姉妹は顔に「美人班^{ムーシユ}」という付けほくろを張って色白に見せたり、2日間絶食してほっそりとみせたりするが、その「美人班」（ムーシユ mouche）について原文にない詳しい説明を付加している。灰娘が泣いていると、教母が出現し、「これから先も優しい娘でありませうね」（原典：これからもいい子にしてるなら）と念を押して、舞踏会に行かせてくれる。ここでは「いい娘」とは「優しい娘」と解釈されている。魔女と訳されているが原典では教母（marraine）であるので、妖精ならともかく、魔女という訳語は適切かどうか疑問である。その他の箇所はペローの原典にほぼ忠実な訳である。

（3）邦訳者の概要

若目田三郎についての詳細は不明である。海外留学経験があり、英語だけでなく、フランス語にも造詣が深い若目田姓の人間は若目田武次のみである⁴⁴。彼は和田垣謙三と共に英語読本を書いているので、おそらく教育関係の仕事に携わる人であろう。和田垣は1909（明治42）年に星野久成と共に訳で「真珠姫」という題名でグリム童話選集『グリム原著 家庭お伽噺』を出版している⁴⁵、フランス語に造詣が深い若目田武次が若目田三郎という筆名で、ペロー版のシンデレラを訳した可能性が高いと推測する。

11) ㊸ 1922（大正11）年4月 中島孤島「かまど姫（童話劇）」『金の船』（金の星）4月号と5月号 ほるぷ出版 P ペローの大幅改変版

（1）邦訳の概要

ある所に3人の娘がおり、上の娘はふぢ、中の娘はあやめ、末の娘はすみれという名である。すみれだけ前妻の子で、すなほなやさしい娘であるが、かまどの前で灰まみれになって丸まって寝ていたので「かまど姫」と呼ばれる。彼女は自分も姉たちと一緒に城に連れて行ってくれと継母に頼むが、着ていくものがないという理由で断られる。すみれは私も行きたいと死んだ母に泣いて訴える。竈の後ろから白い老爺^{おぢいさん}が出てきて、鳩の杖で叩き、お前の守護神だから、望みをかなえてやると言う。老爺さんは彼女に戸棚の陰に入^{まもりがみ}って、目をつぶり、まじないをしながら、三遍廻って出て来いと言う。彼は鳩の頭を自分の方に向けて呪文を唱える。

「鳩、鳩、飛べよ。西の方へバタ／＼、東の方へバタ／＼、彼方で鳴いて、此方で鳴いて、上を下へ、中を外へ、ぐるりと廻つて、暗い方^{ぼろ}を明るく、襤褸^{にしき}をかえして、錦の方をだァせ。」

すると、ぼろの衣服が金銀の錦の衣服に変わる。箆^{ざる}を馬車に、親鼠^{おやねずみ}を馬に、鼯鼠^{はつかねずみ}を御者に変身させる。12時の時計が鳴ると魔法が解けるので、それまでに帰宅するように言い、水晶の沓

をやる。すみれは城に行く(4月号)。

王子が不思議な姫とばかりおどっているの、母が家来に彼女は誰かと聞くと、「ご自分では白玉伯爵の令嬢だといつていらつしやるのですが、いづれどこぞの女王殿下に相違ありません」と家来が答える。王子と姫は踊りながら2人の姉妹の前に来て会話する。

かまど姫「あれはどこの方？」

王子「町の娘でせう！なにつまらないものです！」

かまど姫「それでもお二人ともきれいな方ですわね！」

王子「あなたの前へ出たら、孔雀の前の鳥ぐらゐなものだ！」

かまど姫「まア！」

王子が白玉城はどの方角かと聞くと、かまど姫は東の方だと言う。王子が昔の人が蓬莱の島と呼んだところかと聞くと、そうだと姫が答える。王子は貴女は天女のようなから、人間界の方じゃない、甘露でも吸って、香ばしい花の中に遊んでいらっしゃるに違いない、白玉城へ行く道を教えてくれと言う。姫は舞踏が始まったと言う。そのとき、時計が十二時を打つ。かまど姫は驚いて立ち上がり、顔色を変えて廊下の方に駆けだす。戸口を出る拍子に、水晶の靴が片方脱げたのも知らないくらい慌てていた。継母は「あの姫さまが、どこかうちのすみれに似てゐたやうな気がするんだが」と言う。

2人の姉妹は靴を試すが、痛そうだったので、王子に拒否される。もう1人の娘は誰だと聞かれると、召使いで汚く意地の悪い女だと継母が言う。家来ではなく王子自らが娘に靴を履かせる。娘は王子と目を合わせ、にっこりと笑って袂からもう片方の靴を取り出す。王子は「最早疑ふ所はありません。さァ、白玉伯爵の令嬢、お手を下さい！あなたは今日からわたくしの妻です」と言う。継母は顔色を変えて召使いだと言張る。そのとき老翁^{おぢいさん}が現われ、呪文を唱えている間に、かまど姫に家に入って3遍廻って出て来いと言う。出て来たかまど姫は金銀の衣服を身に着け水晶の靴を履き、本当の姫君の姿になっていた。継母と2人の姉は、美しい姫の姿を見て、その場にひれ伏し「白玉城のお姫さま^{ひい}」と言う。姫は王子に1つ願い事を聞いてほしいと言う。王子が許可すると、姉さんたちも一緒に連れて行ってほしいと言う。3人は泣いて姫に謝る。すみれが老爺さんに礼を言うと、「みんなお前の心掛けがいいからだ。それでは王宮へ行って、幸福に暮らしなさい！」と言う。

(2) 邦訳の分析

2人の娘に「ふじ」「あやめ」、前妻の娘に「すみれ」と花の名前を付ける。舞踏会に行きたいと母の墓前で泣いて頼むと現れる守護神は、白い鳥ではなく白い老翁^{おぢいさん}である。老翁が戸棚の陰に入ってまじないをし、3遍廻って呪文を唱えると、檻褌^{ぼろ}が錦の衣装に変わる。女の妖精が男の老爺に変えられ、杖ではなく3回廻って呪文を唱えるという日本の神道的な方法に改変されている。不思議な姫は素性がわからないのではなく、「白玉伯爵の令嬢」とされている。彼女が王子に継

娘たちについて聞くと、王子は町の娘で、つまらないものだと言え。娘は白玉城の方角は東で蓬萊の島だと答える。王子はすみれを天女のように人間界の者ではないように思えると言う。娘は戸口を出る拍子に水晶の靴を片方落とす。継母がああ姫はすみれに似ていたという原典にはない感想を漏らす。継母たちは靴を試すが、痛そうだったので断られる。継母はすみれのことを「召使で汚く意地の悪い女だ」と言う。王子自らすみれに靴を履かせ、靴が足に合うと、老翁が現われて呪文を唱える。同時に、すみれに家に入って3遍廻って出て来いと言う（原典：杖で魔法をかける）。すると、すみれは金銀の衣装に身を包まれた姿になる。

ここでは、前半の母の墓前に頼むまではグリム版だが、父の土産の榛に鳥ではなく、守護神が出現して、願いをかなえてくれる。その守護神の性別は女性（教母）から男性（老爺）に改変されている。魔法の杖で変身させるのではなく、呪文を唱える間に3遍廻って出てくると、願いが叶うのである。日本の読者にわかりやすいように、日本的改変を施したのであろう⁴⁶。ペロー版に日本的要素を挿入して大幅に変えた改変版である。

（3）邦訳者の概要

中島孤島については第2章5）（3）に詳述しているので、ここでは省略する。

12) ②4 1924（大正13）年6月 葉多黙太郎 金の靴『グリム童話集』崇文館書店 G 原文にほぼ忠実訳

（1）邦訳の概要

臨終の床で母が「いゝ心掛けで」でいたら、神様が守ってくれるし、母さんも天から見守っていると。継母は娘の服を乞食のようなものにし、靴も木靴にして、女中として酷使する。娘は竈の灰の中に転んで寝ていたの、消炭さんと呼ばれる。父に「帽子に触れた檜（原典：榛）の枝」を土産に要求し、母の墓に植える。白い小鳥が欲しいものを出してくれる。宮殿で3日間の大舞踏会が開催される。消炭さんが連れて行ってほしいと頼むと、1つの桶（原典：鍋）の様々な豆を2時間以内に選別せよという条件を継母が出す。それをやり遂げると、さらに2つの灰桶の豆を1時間以内に選別せよと命じる。課題をすべてやり遂げても服が汚いから連れて行けないと言われる。娘は泣いて母の墓前の檜の木を仰ぎ、「小鳥よ小鳥、着物と靴を、落してお呉れ」と言うと、鳥が、1日目は「今迄見たことも無い様な美しい夜会服」（原典：金銀のドレス）と「銀の靴」（原典：絹糸と銀糸で縫い取った靴）を落としてくれる。日が暮れて娘が帰ろうとすると、王子が送ると言う。娘は納屋（原典：鳩小屋）に駆けこみ、別の入り口から庭に出て服を返す。父は納屋の戸を開けて中を確認したが誰もいない。2日目は昨日よりも美しい上等の着物と靴で行く。娘は王子を振り切るため、大きな木に登る。父は木（原典：梨の木）を根元から切るが誰もいない。3日目は真珠をちりばめた服（原典：誰も見た事のないほど豪華で光り輝くドレス）と月のように光る黄金の靴（原典：全部が純金の靴）を身に付けていく。王子は道に松脂（原典：ピッチ）を塗らせていたので、金の靴が片方脱げる。翌日消炭さんの家に行き、継姉に靴を試させる。継母が姉の大きすぎる指を切らせて無理やり靴を履かせると、王子はこの娘だ

と言って、姉を馬に載せて連れて帰る。途中、櫓の木の下を通ると小鳥が靴から出血しているのが花嫁ではないと言う。妹も踵を切って靴を履くと、王子は花嫁と思い込んで連れて帰るが、途中で血が出ていることを小鳥に指摘されて引き返す。王子が消炭さんに履かそうとすると、父が汚ない(原典:できそこないの)娘だからと言って断るが、王子は承知しない。王子が消炭さんに、自分が見ている前で履くようにと言う。足が靴にきっちりと合うと、「あゝこの娘だ、この娘だ」と叫び、よく顔を見ると、あの娘だと確信して、馬に乗せて城に連れて行く。墓場の櫓の木の下を通るとき小鳥は本当の花嫁だと保証する。結婚式のとき、2羽の白い小鳥は継姉たちの両目を突き、盲目にする。「消炭さんが、心掛けのやさしかつたのを神様に愛でられ、死んだお母さんに護られて、外に例の無い様な幸福な身の上になったのに引替え、二人の意地悪の姉妹は、遂々盲目になつて仕舞つて、世にも哀れな惨な身の上にならねばなりませぬでした」で終わる。

(2) 邦訳の分析

母の墓前に植えるのが櫓の木(原典:榛の木)に変えられている。娘が帰ろうとする時間帯は夜中の12時ではなく夕方で、グリム版の原典と同じである。王子を振り切ろうとして娘が飛び込むのは納屋(原典:鳩小屋)で、登るのは大きな木(原典:梨の木)になっている。王子は道に松脂(原典:ピッチ)を塗らせておく。王子が消炭さんに靴を履かそうとすると、父が「汚ない娘」(原典:發育不良の娘)だからと断る。王子は「あゝこの娘だ、この娘だ」と叫び、よく顔を見ると、あの娘だと確信する(原典:立ち上がった娘の顔を見ると、まぎれもない一緒に踊った娘だったから、大声で「この人こそ、本当の花嫁だ」と言う)。継姉たちが悪行の報いとして盲目に処せられることが原典通り記載されている。グリム版に忠実な訳である。

(3) 邦訳者の概要

葉多黙太郎は土師清二の弟子の文筆家だと中一弥は言う⁴⁷。1929(昭和4)年に『神戸新聞』に「平安異香」という連載小説を書いている⁴⁸。しかし、葉多は直木三十五よりも有名ではなかったようだ⁴⁹。また、彼は葉田黙太郎という名前で「なまけ狸」という童話脚本を貯金奨励懸賞に応募し、選外佳作になっている。審査員の小山内薫は、「おことわり」として、本書の編成間際に起こった関東大震災(1923年9月1日)のため原稿共焼失したので、再び募集したが、「選外佳作『お十五夜』『幸福の泉』『なまけ狸』の三篇は、筆者所在不明等のため遺憾ながら輯録することが出来なかった」と書いている⁵⁰。貯金局の住所は東京市小石川区であるので、震災の被害を強く受けたのである。これにより、葉多黙太郎の実名は葉田黙太郎であると推測する。なぜなら、懸賞小説に応募する場合、筆名であると可否通知が届かないので、通常実名を書くからである。彼は1926(大正15)年11月10日に葉田黙太郎の名で学校児童劇を3本書いている。『雛まつり』(喜劇歌)、『死んだカナリヤ』(少年少女樂劇)、『或日の竜宮』(お伽劇)という題名で、いずれも石井出作曲で文英堂書店から出版している。葉田黙太郎の職業はジャーナリストか、学校関係者のいずれかであろう。彼はグリム童話についても詳しく、「此のお伽集は、[…] 仏蘭西語にも英語にも露西亞語にもと云つた風に、大抵の國語に翻譯せられて、今では世界中の子供達のいゝお相手になつてゐます」と「はしがき」に書いている。なお、見慣れない動植物や人

名は適宜に改めたり、改変したりしたと断りを入れている。

13) ㊥ 1924（大正 13）年 7 月 柏木治子訳 シンドレラ『グリム童話』南海堂 G 原文には
は忠実訳

（1）邦訳の概要

臨終の床に娘を呼んで「御父様の仰有事を聞いてい、娘になつておくれ。さうすれば神様も
守つて下さるしお母様も草葉の蔭から力ぞへして上げるからね」と言う。継姉たちは顔容は美
しいが心は悪い。豆を灰の中にひっくり返したり、寝床をやらなかったり、娘に意地悪をする。
娘は竈の中で寝るので、「シンドレラ（きたない子という意味）」と呼ばれる。娘は帽子に当たっ
た榛の枝をもらい墓に植えて泣く。日に 3 回墓参りをする。ダンス会に行かせてくれと継母に頼
むと、桶 1 杯の豆を灰の中から 2 時間以内に拾えば行かせてやると言う。課題をやり遂げると、
今度は桶 2 杯の豆を灰から拾えと言う。再び課題をやり遂げると、今度は着物もなくダンスもで
きないという理由で同行を許さない。シンドレラが墓で榛の木に「涙で育った榛 / 枝打ちふつ
て / 私の着物を降らせ」と唄う。すると白鳩がとんできて、「金や銀で作った着物や金のかざ
りのある絹の靴」を持参してくれる。彼女は宴会に行つて王子と踊り、夕方に帰宅する。王子が
追跡するので、彼女は鳩小屋に逃げ込む。父ではなく母が鳩小屋を壊すが、中には誰もいない。
翌日も王子が追跡するので、娘は梨の木に登る。王子は王（原典：父親）に娘が梨の木に登った
と言う。王は斧で木を切らせるが誰もいない。3 日目は道（原典：階段）に撒かれた松脂のせいで、
娘の左の金の靴が脱げる。2 人の姉は母に言われてナイフで親指や踵を切り取り、足をむりやり
靴に入れる。王子は姉を姫と信じて馬に載せて連れて行く。しかし、墓の所まで来ると、鳩が靴
からの出血を指摘したので、偽物と判明し引き返す。次に妹を連れて行くが、同様の結末を辿る。
王子は父親に他に娘はいないかと聞く。シンドレラが試すと靴は足にぴたりと合う。王子は顔を
見て意中の姫だと認識する。墓の鳩もこの娘が皇后だと保証し、娘の肩に止まる。娘は城で結婚
式を挙げ、国中の者が喜び、2 人はいつまでも幸福に暮らしたという。「めでたし／＼」で終わる。
ここでは継姉たちへの復讐（盲目にする）は削除されている。

（2）邦訳の分析

母親が臨終の床で娘に言う言葉は「御父様の仰有事を聞いてい、娘になつておくれ」とされ
ているが、原典では「信心深いいい子（fromm und gut）でいなさい」である。信じ崇めるべき
対象が「神」から「父」に改変されているのである。「桶」一杯の「豆」になっているが、原典
では「鉢」一杯の「ヒラ豆」（eine Schüssel Linsen）である。娘は竈の中（原典：竈のそば）で
寝るとなっている。シンドレラという名は、汚い子（原典：灰だらけ）という意味だとされてい
る。母（原典：父）が斧で鳩小屋を壊す。2 日目は王（原典：父）が梨の木を切る。墓の鳩も娘
が皇后（原典：花嫁）であると保証する。継姉たちへの報復（原典：眼球除去の刑）は行われない。

（3）邦訳者の概要

柏木治子（婚姻後の実名生源寺美子）（1914-2015）は柏木三郎夫妻の五人兄姉の末子として奈

良県で生まれる。1歳になる前に、両親の郷里である福島県に移る。師範学校の校長等を歴任し教育界で活躍した父親の転勤で、幼少期を東北や関西地方で過ごし、さらに、朝鮮（現・韓国）に渡り、京城公立第一高女、大邱公立高女をへて、日本に戻り、東京自由学園高等部（旧制）を卒業する。結婚して子育てが一段落した頃から、家事の傍ら童話を書き始める。1955（昭和30）年頃に『婦人朝日』（朝日新聞社発行）という雑誌の「私の童話欄」に投稿し何度も入選を果たす。当時、その童話欄の選者だった詩人で児童文学者の与田準一氏の指導をうけ、同じ入選仲間の岩崎京子らと「童話の会」を結成、同人誌「童話」を作り創作に励む⁵¹。

柏木治子の筆名でこの本を訳したのは、彼女が10歳の時である。10歳の少女が翻訳をするのは無理であろう。おそらく師範学校校長など教育界で活躍していた父親、柏木三郎が治子の名前を使って翻訳したのであろう。この翻訳が出た大正13年には柏木三郎は秋田師範校長であった。それ以前、彼は奈良女高師創設の時、付属小学校に所属していて「大いに画策するところあり、新進気鋭の矛先を示して、若き訓同書訓を喜ばせたものであるが」、鉾先が餘に鋭くて、警戒され、病気になり、秋田に転職したのである。秋田で彼は明星学園長の赤井米吉を主事に招くが、学校劇をやろうとして役人と衝突する。学校長という立場上、西洋昔話の翻訳を公けにするわけにはいかず、10歳の娘の名前で『グリム童話』の翻訳（10話分の選集）を世に出したと推測する⁵²。

14) ㊹ 1924（大正13）年8月 金田鬼一訳 灰かぶり『世界童話大系』第二巻 世界童話大系刊行会 G 原文に忠実訳

(1) 邦訳の概要

母は娘に対して「坊や、いつまでも神様を大切に^{だいじ}して、^{きだて}気性をよくしてゐるのですよ〔…〕母さんも天からお前^{みおろ}を瞰下してゐて、お前のために思つてあげてよ」と言う⁵³。継姉たちは顔は美しく白かつたが、心は醜く真黒であった。娘に鼠色の古い尻切袴纏〔原典：Kittel（仕事着）〕を着せ、木靴を穿かせ、豌豆や扁豆を灰にぶちまけて拾うよう命じる。娘は竈の傍の灰のなかで寝るので、アッシュエンブッテル（灰娘）と呼ばれる。父の帽子に当たった小枝〔原典：Haselreis（榛の枝）〕は墓に植えられ、娘の涙で成長する。王が饗宴^{ごちそう}〔原典：Fest（宴会）〕をするので、城に行かせてくれと継母に懇願すると、継母は大皿の扁豆を灰の中から2時間以内に拾いだしたら行かせてやると娘に言う。娘が課題を成し遂げると、今度は2皿の扁豆を灰の中から拾い出せと言う。それも成し遂げるが、継母は衣服がなく踊りもできないという理由で娘を連れて行かない。娘は墓の榛の木の下で言う。「可愛い樹、グラグラ動いて頂戴な、ぶるぶる震えて頂戴な、金と銀をあたしへ落として頂戴な。」すると、例の鳥が金糸と銀糸で織った衣装と、金糸と銀糸で縫刺繍したお座敷靴を落としてくれる。それを身に着けて彼女が城の宴会に行くと、王子は彼女とのみ踊る。娘が暇乞いをする、王子が後を付けるので、娘は鳩小屋に飛び込む。2日目は梨の木に飛び乗る。3日目は王子が瀝土青^{チヤン}を階段一面に塗らせておいたので、灰被りが跳降りたとき、お座敷靴の左の方が階段にくっついたので、そのまま置去りにする。靴は全部金でできている。姉は靴を試着すると、親指が大きすぎたので爪先を切る。妹は踵が大きすぎたので踵を切る。王

子は靴を履いた姉と妹を順番に連れて行くが、墓の榛の木の上の 2 羽の鳩が出血を指摘して偽物だと知らせる。王子は出血を確認して家に戻り、他に娘はいないかと聞く。灰かぶりのことを父は「発育の足りません誠にむさくしい小娘」と言う。その小娘が靴を履いて立ち上がると、王子は顔を見て「あの美しい娘」であると悟る。継母と姉たちは吃驚して蒼白になって怒る。墓のところに来ると鳩が「ほんとの嫁御」だと保証し、姫の両肩に止まる。結婚式に姉妹が付き添うと、鳩が姉妹の目玉を突き出し、全盲にしてしまう。姉妹は意地悪や替え玉になったことに「罰が當つて、とうとう一生盲目^{めくら}で居りました」で終わる。

(2) 邦訳の分析

言葉遣いが古風で、とくに服装に関する表現がそうである。Kittel（仕事着、スモッグ）を「尻切絆纏^{しりきばんてん}」と訳したり、女の子に対して「坊や」と呼びかけたり、古風な表現が目立つ。「継母と姉たちは吃驚して蒼白になって怒る」と訳しているが、„Die Stiefmutter und die beiden Schwestern erschranken und wurden bleich vor Ärger“ は「継母と姉たちは驚いて怒りで蒼白になった」と訳すべきであろう。その他はすべて原文に忠実な訳である。この話は決定版の原典では 21 番目であるが、金田訳では 23 番目の話である。グリム兄弟が改版の際、削除した話なども収録しているので、金田訳の番号は決定版より 2 話ずれて 23 番目の話になっているのである。

(3) 邦訳者の概要

金田鬼一（1886-1963）は東京帝国大学文学部独文科を 1908（明治 42）年に卒業し、ドイツに留学するが、第一次世界大戦が勃発したため留学期間を短縮して 1914 年 10 月に帰国する。その後、金沢の四高や学習院大学で教授として教鞭をとる。1924（大正 13）年から 1927（昭和 2）年にかけて『グリム童話集』を全訳し、日本初の全訳本を世に出した人である⁵⁴。この全訳本には決定版の 210 話だけでなく、初稿（2010 年）から第 7 版（決定版 1857 年）の間に差し替えられた話や断片なども収録されてため、合計 248 話（原典：210 話）が収録されている。

第 3 章 大正期の邦訳内容の分析とその結果

1) 邦訳 13 話の内容分析表【表 2】

表示記号の説明 A：実母の臨終の言葉 B：父の身分 C：娘のあだ名 D：父の土産 E：救済者 F：南瓜の馬車などの出現の有無と道具 G：魔法の服 H：魔法の靴 I：門限 J：王子の送迎 K：父の登場 L：落とす靴の左右 M：タール塗布 N：靴の持参者 O：姉妹の靴合わせ P：人違いを指摘する存在 Q：父親の悪評価 R：見つけ出す人 S：結婚後の身分 T：継姉へ態度 U：G 版か P 版かの表示 V：その他（手土産など）

	1 ⑬	2 ⑭	3 ⑮	4 ⑯	5 ⑰	6 ⑱	7 ⑲	8 ㉑	9 ㉒	10 ㉓	11 ㉔	12 ㉕	13 ㉖	14 ㉗
A	神を念じおとなしくする。神と母が見護る	信心深く正直に。神と母が見守る		信心深く正直に。神と母が見守る	正直に ^{おとなしく} 温順くする。神と母が見護る		正直に ^{おとなしく} 温順くする。神と母が見護る					いい心掛け。神と母が見護る	父の言うことを聞かない娘。神と母が見護る	神を大切に気性をよくする。神と母が見護る
B	金持ち	富豪	紳士	富豪	金持ち	英国人	金持ち	殿様	紳士	紳士		金持ち	金持ち	金持ち
C	灰かぶりさん	燃屑姫	お鍋さん灰娘	燃屑姫	消炭さん	お花	消炭娘	姫(無名)	サンドリヨン	爐ばたの娘	かまど姫	消炭さん	シンデレラ(きたない子)	アッシュエンブッテル(灰娘)
D	榛の枝	榛の枝		はんなのき 榛樹の枝	榛の枝		榛の枝					櫛の枝	榛の枝	榛の枝
E	白い鳥	白い鳥	女神	白い鳩	白い小鳥	女神	白い小鳥	2羽の白鳩亡き母	教母妖女	教母魔女	守り神老爺	白い小鳥	白い鳥	白い小鳥
F			有銀の杖			有鞭			有杖	有杖	有杖			
G	光沢のある輝いた服	立派で燦然たる服	金銀の夜会服	立派で燦然と輝く衣装	立派なビカビカした着物	目の醒める様な美しい衣服	金銀の立派な着物	金銀宝石付きの立派な衣服	宝石付き金銀の衣装	金銀の模様には宝玉が付いた着物	金銀の光輝く錦の衣服	真珠付きの上等の着物	誰も見たことがないほど美しい着物	誰も見たことがないほど美しい光り輝く衣装
H	金糸で縫ひとられた上靴	すっきり黄金の靴	水晶の靴	すっきり純金の靴	純金の上沓	びいどろおどりつ踊靴	純金飾りのある上沓	金の上靴	ガラスの上靴	がらす 玻璃の靴	水晶の沓	光る黄金の靴	純金の靴	全部黄金の御座敷靴
I			12時			12時			12時	12時	12時			
J	有	有		有	有		有					有	有	有
K	有	有		有	有		有					有	有	有
L	左	左	片方	左	左	片方	左	片方	片方	片方	片方	片方	左	左
M	瀝青	瀝青		瀝青	松脂		松脂					松脂	松脂	瀝土青
N	王子	王子	役人	王子	王子	王	王子	王子	家来	役人	王子	王子	王子	王子
O	足切断	足切断	不適合	足切断	足切断	足切断	足切断	足切断	不適合	不適合	不適合	足切断	足切断	足切断
P	2羽の白鳩	2羽の白鳩		2羽の白鳩	2羽の白鳩		2羽の白鳩					2羽の白い小鳥	2羽の鳩	2羽の白鳩
Q	有	有		有	有		有	有				有	有	有
R	王子	王子	役人	王子	王子	王	王子	王子	家来	役人	王子	王子	王子	王子
S	王妃	皇后	妃	王妃	妃	后	妃	妃	妃	妃	后	妃	皇后	妃
T	盲目の刑	盲目の刑	許し結婚相手を斡旋	盲目の刑	盲目の刑		盲目の刑		許し結婚相手を斡旋	許し結婚相手を斡旋	許し城で暮らす	盲目の刑	盲目の刑	盲目の刑
U	G	G	P	G	G	P	G	G	P	P	P	G	G	G
V						土産に甘藷		2羽の鳩が祝う。			3回廻り呪文で美服			

2. 【表2】の分析結果

娘の名前が日本化されたものが10話(消炭3、燃屑姫2、お鍋、爐ばたの娘、かまど姫、お花、灰かぶり)、西洋化されたものが3話(アッシュエンブッテル、サンドリヨン、シンデレラ)名前がないのが1話(姫)で、明治期に較べて日本化されたものが多くなっている。

実母が臨終の床に娘を呼び、信心深くよい子(fromm und gut)でいなさい、天から神と母がおまえを見守るからという言葉(グリム原典に収録)が邦訳されているのは8話⑬⑭⑯⑰⑲⑳㉑㉒、つまり、すべてのグリム版の訳においてである。よい(gut)をおとなしくと訳しているのが3話⑬⑰⑲、正直が2話⑭⑯、気だてがいいが2話㉔⑬、父に従順が1話㉖である。大正期の「よい子」とは「おとなしく」「正直で」「気だてがよく」また「父親に従順な」子を意味するようで

ある。母の守護神は白い鳥の姿（8話¹³¹⁴¹⁶¹⁷¹⁹²⁴²⁵²⁶）で現われ、娘の窮地を救うときは「白い鳩」と種類が明記される。一方、ペロー版では実母ではなく、教母が2話²¹²²、女神が2話¹⁵¹⁸、老爺の守護神が1話²³である。男性の守護神が登場するのは、²³中島孤島訳の童話劇「かまど姫」においてである。同じ中島訳でも¹⁷の『グリム御伽噺(新訳)』に収録されている「消炭さん」はほぼ原文に忠実な訳であるが、童話劇になるとペロー版を大幅に改変し、救済者は女性の教母から、年老いた男性の守護神に改変される。

また、杖と呪文の力だけでなく、本人が戸棚の蔭に入って、3回廻って出て来ると美しい姿に変身する。3回廻ると願い事が叶うという信仰は神道からきたもので、古事記、日本書紀などでは、三柱大神が渡韓の折、宮地嶽山頂で天神地祇を祀り旅の開運を祈願し船出したと伝えられている。以来、何事にも打ち勝つ開運の神として信仰されるようになり、今では「金成・商売繁盛の神」としても信仰されているという⁵⁵。3回廻ると開運の神が娘の姿を「運が開ける姿」に変えてくれるという日本的改変は、中島孤島が童話劇でのみ施したものである。

興味深いのは同じ教母と訳していても、楠山と若目田は異なる言葉の同意語であると理解していることだ。両者とも教母とは名付け親のことであるとし、さらに、楠山は願いをかなえてくれる妖女だと解釈し、若目田は娘を守ってくれる魔女だと説明している。つまり、妖女も魔女も肯定的な意味で使用されているのである。

衣装が和服の着物は6話¹⁷¹⁹²⁰²¹²³²⁴あり、立派なピカピカした着物、金銀の着物、金銀宝石の着物、真珠を散りばめた着物、見たことがないほど美しい着物などを着用する。洋服は8話¹³¹⁴¹⁵¹⁶¹⁸²¹²²²⁵であり、光沢のある輝く服、立派で矜然と輝く服、金銀の夜会服、目の醒めるような美しい衣服、宝石が付いた金銀の衣装、金銀の光に輝く錦の衣装、誰も見たことがないほど美しい光輝く衣装などである。

落とす靴の素材は純金が最も多く9話¹³¹⁴¹⁶¹⁷¹⁹²⁰²³²⁴²⁵で、ガラスが3話¹⁸²¹²²で、水晶が2話¹⁵²²である。落とす靴の左右が明記されているのは7話¹³¹⁴¹⁶¹⁷¹⁹²⁴²⁵であり、片方とのみ表記されているのも7話¹⁵¹⁸²⁰²¹²²²³である。門限の設定が夜中12時のものは5話¹⁵¹⁸²¹²²であり、後の9話には門限は設定されず、グリム原典同様、日が暮れると娘が自ら帰宅を申し出るのである。

父親の出現に関しては、ペロー版では言及されていないものが3話¹⁵¹⁸²²、継母に丸め込まれているとされているのが2話²¹²²で、その内1話²¹では、逆に自分の娘を「しかりとばすばかり」と書かれている。一方、グリム版の父親は原典通り、実子に対して残酷な人として登場する。彼は娘が鳩小屋に飛び込んだり、梨の木に登ったりしたと聞くと、斧で小屋や木を切り倒す。邦訳でこの部分を訳しているのは8話¹³¹⁴¹⁶¹⁷¹⁹²³²⁴¹⁵で、1話²⁰を除くすべてのグリム版の訳において訳出されている。明治期は1話しか存在しなかったのも、この点は大正期の邦訳の大きな特徴といえる。

靴合わせに来る人物は家来（役人）⁵⁶が3話¹⁵²¹²²で、王子が10話¹³¹⁴¹⁶¹⁷¹⁹²⁰²²²³²⁴²⁵で、王が1話¹⁸である。新井弘城（南部新一）訳、英国の話「踊り靴」¹⁸では王子は出現せず、王が

娘(お花)と踊り、結婚する。なお、この話では娘は舞踏会に行くのに土産を持参する。それは女神が甘藷を杖で叩いて変身させた品物である。明治期の白雨楼主人(増田丘一)訳「英国お伽噺 踊靴」⑥でも甘藷を変身させた土産物を娘が城に持参するし、娘が踊る相手も王子ではなく王である。また、継母の連れ子も2人ではなく、1人である。そのうえ題名も同じである。以上の点から、南部は増田訳を踏襲したものと推測する。異なる点は靴合わせの場面である。増田訳では、緩和させた表現ではあるがグリム版を踏襲しており、継姉が足の肉を切って出血し、王から小言を言われたと書かれているが、南部訳では「意地悪のお鳥姉さんも、同じ様に、履かうといたしました、矢張駄目でありました」で終わり、出血したとは書かれていない。

グリム版もペロー版もそれぞれ原典にほぼ忠実に訳出されている。また、1話だけ英国版と明記されている南部訳⑱も、他の箇所同様、ペロー版に基づいた表現に訳されている。

いじめた継姉に対するシンデレラの態度は、明治期とは異なって厳格なものになり、2人の両眼を2羽の鳩に突かせる「眼球除去の刑」に処すものが大多数を占める。なぜなら、グリム版の原典に忠実な訳が8話もあり、それらがすべてこの刑罰を忠実に訳出しているからである。ペロー版の訳3話⑮⑰⑱では、継姉たちを許し、結婚相手まで斡旋してやるという原典に忠実な訳になっている。グリムとペローの折衷版である中島訳児童劇⑳では継姉たちを許して城で共に暮らす、結婚相手の斡旋までは行わない。グリム版を改変した巖谷訳では、鳩は眼球除去の罰を与えず、2人の結婚を祝うという形で話が終わる。継母や継姉たちについての言及はない。グリム版やペロー版に近い英国版⑱でも、シンデレラの結婚で終わり、継姉たちについての言及はない。

明治期には英語訳の影響を受けて、主人公による復讐ではなく、神の裁きであるという表現に和らげられているものが多く存在したが、大正期にはこの傾向はみられない。おそらく独和対訳本が多く出版されたので、英語訳からの重訳が激減したことが原因であろう。

結論

大正期の邦訳14話のなかで、最も大幅な改変が加えられていたのは、童話劇の脚本として書かれた中島孤島の「かまど姫」㉓である。雑誌『金の船』の4月、5月号に収録されたものである。グリム版の原文に忠実な訳を数多出版している中島であるが、学校で演じることを念頭に置くと、観客受けするようにペロー版を使い、それに大幅な改変を施している。女性の妖精ではなく、男性の守護神が娘を救うという改変もそのひとつである。その方法も魔法の杖で変身させるのではなく、本人が戸棚に入って3回廻って出て来ると美しく変身するという、日本の神道的伝承に由来した方法を取り入れているのである。

明治期には「新貞羅」「おすす」「おしん」「真珠姫」「燐娘」などの日本化されたものと、「シンドラー」「シンドレラ」「シンダレラ」「シンデレーラ」と英語名を使用したものが半々であった。大正期になると英語名は激減し、「シンドレラ」1話になる。仏語名「サンドリヨン」1話が出現するが、外国語名はこの2話のみで、残りの12話はすべて和名に置き換えられている。「灰かぶり」2話、「燃屑姫」2話、「消炭娘」2話、「爐邊娘」「かまど姫」などで8話もある。同時に靴に焦

点を当てた題名が4話も出現する。「金の靴」2話、「水晶靴」「踊り靴」である。大正期デモクラシーと言われる時期には、児童向き雑誌では外国語名を日本語化する傾向が見て取れる。なかには、同一人物が、時代によって異なる題名で訳す場合もある。たとえば、中島孤島は大正期だけでも「消炭さん」と「かまど姫」と2種類の名前で邦訳し、昭和期の戦前にはさらに変更して「灰皿」（昭和13年）とし、戦後には再び「消炭さん」（昭和27年）に戻している。

明治期は国語教科書に入れられた話が最も改変度が高かったが、大正期は学校で演じる童話劇の脚本として書かれた話が最も改変度が高い。いずれも教育的意図が前面に出る場合に改変度が高くなるようである。南瓜が馬車に、鼠が馬などに変身するファンタジックなペロー版でさえ、原文に忠実ではなく、日本化されなければ教育現場では受け入れられない背景が存在したのであろうか。

グリム版に最も忠実な訳は、⑬田中樞吉訳「灰かぶりさん」、⑭岡長汀訳「燃屑姫」、⑯金田鬼一訳「灰かぶり」の3話である。⑬と⑭はドイツ語併記の対訳本で、⑯は日本語の訳本で『世界童話大系』第2巻 獨逸篇に入れられたものである。

ペロー版に最も忠実な訳は、⑳楠山正雄の「サンドリヨンの話—又の名ガラスの上靴」で、世界童話名作集第1篇『驢馬の皮』に収録された話である。原典と異なる箇所は「屋根裏部屋」が「物置」に、つける飾りが「イギリス製」から「フランス製」に、「ブローチ」が「胸あて」に、「美容師」が「禮法家」に、「ジャボット」が「シャルロット」に、「微笑みながら」が「つひ笑ひだしてしまつて」に、「つけほくろ」や「髪を二列に高く結い上げる」という表現が削除され、名付け親の教母を「妖女」としている点である。一方、㉑若目田三郎訳「爐邊の乙女」では、継姉たちがつける「つけほくろ」について詳しい説明が付加され、美人斑（mouche ムーシュ）は「二百年前には女が顔の色を白く見せるために態々顔面に黒い絹の切端などをはつたもの」と原文にない説明が挿入されている。さらに娘を救済してくれる教母について「これは子供が洗禮を受ける時に名づけ親となる人ですが、ここでは娘を守ってくれる魔女のことをいいます」と加筆している。「教母」を楠山は「妖女」、若目田は「魔女」と訳しているが、いずれも肯定的意味で使用している。ペローの原文に忠実な訳は楠山の方だが、若目田はフランスの昔の風習について加筆し、読者が理解できるよう配慮している。

大正期に「シンデレラ」が語学教育を目的として出版された「教育読本」に収録されているのは、ドイツ語と日本語の対訳本のみである。グリム版「灰かぶり」が独日対訳版教科書に収録されているのである。一方、フランス版「サンドリヨン」は仏日対訳教科書には収録されていない。第一時世界大戦で連合国側に属した日本にとってドイツは敵である。にもかかわらず、グリム版「灰かぶり」が教科書版に収録され、学生に紹介されているのである。グリム童話を教育材料として使用することを奨励したヘルバート学派の教えが浸透して、大正期に顕著になったからと推測する。

（2024年9月30日受理）

（のぐち よしこ 研究員）

注

- ¹ ⑬⑰②⑤など○印で表示した番号は、明治期からの通算邦訳番号である。
- ² 舩屋仁奈「日本におけるシンデレラの改変—明治期から1960年代までを中心に—」日本ジェンダー学会『日本ジェンダー研究』第6号、2003年、44-45頁。
- ³ 同上、引用文献として奈倉洋子の下記の文献を挙げている。「大正期におけるグリムのメルヒェンの受容について」『A 人文・社会／京都教育大学 96巻号』2000年、115頁。
- ⁴ ヤコブ・グリム、ウィルヘルム・グリム著、田中梅吉訳、増山暁子絵『祖稿グリム童話全集』東京堂、1949年 奥付。
- ⁵ 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典 あ～せ』2004年、1552頁。
- ⁶ 田中樞吉訳「獨和對譯 獨逸國民文庫の發刊に就て」『グリムの童話』獨和對譯獨逸國民文庫第1編、南山堂書店、1914年、Ⅶ頁。
- ⁷ *Die Älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*. Herausgegeben und erläutert von Heinz Rölleke. Bodmer Cologny-Genève 1975.
- ⁸ *Märchen der Brüder Grimm. Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenburg in Elsass*. Herausgegeben von Joseph Lefftz. Heidelberg 1927.
- ⁹ 田中樞吉訳「灰かぶりさん」『グリムの童話』前掲書(注6)、I-VIII頁。
- ¹⁰ G版=グリム版の表現、B版=ベヒシュタイン版の表現、P版=ペロー版の表現の略記
- ¹¹ 小泉直美「日本における『ヘンゼルとグレーテル』の受容について —大正期を中心に—」『梅花児童文学』29号 2022年、52頁。(京都帝國大學編『京都帝國大学卒業生名簿』京都帝國大學 1936年7月 315頁)。
- ¹² 『叙位裁可書・大正十一年・叙位卷九』84-87頁、閲覧日 2024年3月2日。国立公文書デジタルアーカイブ (archives.go.jp)
- ¹³ 「Konpeki haruka ni」Keijō Teikoku Daigaku Sōritsu Gojūshūnen Kinenshi Henshū Iinkai 発行、1974年、32頁。
- ¹⁴ 金尾種次郎編『藝文』1(9)、金尾文淵堂、1910年12月、京都文學會役員名簿。
- ¹⁵ 上田敏は1909年から1916年まで京都帝國大学教授であった。小泉直美「日本における『ヘンゼルとグレーテル』の受容—明治期から昭和期まで—」2022年、梅花女子大学大学院博士論文、28頁。
- ¹⁶ 同上、18-32頁。
- ¹⁷ 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典 そ～わ』2004年、2240頁。
- ¹⁸ 同上。
- ¹⁹ 田島啓介「朝日新聞が怪盗ルパンを連載！」『昔新聞・大正時代の記事』1924(大正13)年8月10日付東京朝日朝刊2面の記事「世界的大怪奇探偵談ルブランの「カリヤストロ伯夫人」の解説。

-
- ²⁰ 松村明編『大辞林』1988 年、三省堂、492 頁。
- ²¹ 「彼女」の最初の使用例は坪内逍遙著『当世書生気質』（明治 18 年 6 月 -19 年 1 月）だという。井田好治「訳語『彼女』の出現と漱石の文体」日本英学史学会編『英学史研究』巻 1 号、1969 年、68 頁。
- ²² 日外アソシエーツ編 前掲書（注 17）、2180 頁。
- ²³ 同上。
- ²⁴ 同上。
- ²⁵ 笹川臨風『通俗グリム童話物語』通俗教育普及会出版局、1915 年、序 1 頁。
- ²⁶ 国立教育研究所『日本近代教育百年史 7』教育研究振興会、1974 年、415-416 頁。
- ²⁷ *Deutsche Märchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Mit vielen Bildern von Dora Polster.* Hrsg. v. Thilo-Luyken, M. Ebenhausen, Langewiesche-Brandt 1911.
- ²⁸ 野口芳子「日本における「赤ずきん」の受容」日本昔話学会編『昔話－研究と資料』47 号、2019 年、79-93 頁。特に 84 頁。Wehnert 版（1853,1857）を使用したと推測する。
- ²⁹ 日外アソシエーツ編、前掲書（注 17）、1787 頁。
- ³⁰ 日外アソシエーツ編、前掲書（注 5）、566 頁。
- ³¹ 白雨楼主人『吉田義輝氏 小説体評伝奮闘努力の人』大東書院、1941 年、序 3-5 頁。
- ³² 松村明編『大辞林』1988 年、三省堂、877 頁。
- ³³ 同上、893 頁。
- ³⁴ 少年通俗教育會編『幼年百譚 お話の庫』春の巻、博文館、1916 年、緒言 3 頁。
- ³⁵ 大阪国際児童文学館編『南部新一記念文庫目録 雑誌の部（和書）』1992 年、財団法人大阪国際児童文学館、序。
- ³⁶ 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第 1 巻、講談社、1977 年、51 頁。
- ³⁷ 同上
- ³⁸ 大阪国際児童文学館編、前掲書（注 35）、序。
- ³⁹ 巖谷大四『波の登音 巖谷小波伝』新潮社、1974 年、260 頁。
- ⁴⁰ 国立国会図書館編『近代日本人の肖像』巖谷小波の項目、閲覧日：2024 年 5 月 13 日 <https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/6257>
- ⁴¹ 日外アソシエーツ編、前掲書（注 5）、909 頁。
- ⁴² 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』柏書房、2018 年、174 頁。
- ⁴³ 日外アソシエーツ編、前掲書（注 17）、2553 頁。
- ⁴⁴ 若目田武次は大正 11 年に「ポオ詩集」の翻訳、大正 4 年に和田垣謙三と共著で『模範英文学』（博育堂）でロビンソンクルーソーやガリバー旅行記などの英文で収録し、学生に英語読本として提供している。

-
- ⁴⁵ 拙論「日本における「シンデレラ」(灰かぶり)の受容―明治期を中心に」京都府立大学学術報告人文 75 号、2023 年、189-191 頁。
- ⁴⁶ 坂東十六番札所 五徳山 水澤観世音(群馬県渋川市伊香保町水沢 214)の六地藏が安置される朱塗りの六角堂は中央の輪蔵を押しながら左に三回ると願いが叶うと言う。閲覧日 2024 年 4 月 18 日 <https://mizusawakannon.or.jp/precincts>
- ⁴⁷ 中一弥『挿絵画家・中一弥』集英社、2003 年、32 頁。
- ⁴⁸ 同上、43 頁。
- ⁴⁹ 同上。
- ⁵⁰ 『童話と童話劇』貯金奨励資料第 10 篇、貯金局、1924 年、214 頁。
- ⁵¹ 日外アソシエーツ編、前掲書(注 5)、1298 頁。
- ⁵² 志垣寛『教育界の新人旧人』教育研究会、1927 年、9-15 頁。
- ⁵³ 「坊や」は①幼い男の子を親しんで呼びかける言葉。古くは女兒にも用いた。『大辞林』1988 年、三省堂、2216 頁。
- ⁵⁴ 日外アソシエーツ編、前掲書(注 5)、731 頁。
- ⁵⁵ 宮地獄神社、全国に鎮座する宮地獄神社の総本宮で、息長足比売命(おきながたらしひめのみこと)を主祭神として勝村大神・勝頼大神の宮地獄三柱大神を祀っている。九州旅ネットホームページ。2024 年 4 月 26 日閲覧 <https://www.welcomekyushu.jp/history/shrine/index.html>
弁天様の祠を目をつぶって 3 回廻ると白い蛇が現れるといわれる。白い蛇は縁起が良いと昔から言われていて、白蛇大明神として祀られることもある。国際日本文化研究センター作「怪異・妖怪伝承データベース」閲覧日 2024 年 4 月 26 日 <https://www.nichibun.ac.jp/cgi-bin/YoukaiDB3/simsearch.cgi?ID=0180090>
- ⁵⁶ 松村明扁『大辞林』(三省堂、1988 年)によると、家来とは「主人や主君に忠誠を誓って使える人、従者」(776 頁)のことで、役人とは「官公庁に努めている人、官吏、公務員」(2426 頁)のことである。大正期の記者が家来を役人としたのは(天皇)に仕える人は官吏であると考えたからと思われる。